

---

---

# 時 報

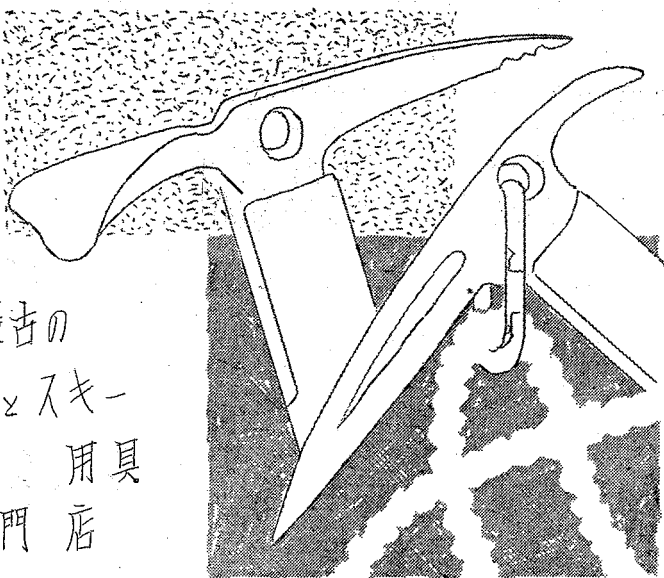
---

---

No. 9

1958.12

大阪大学山岳会



日本最古の  
登山とスキー  
用具  
専門店

大正13年創業

大阪・東京・神戸・福岡

# 好日山莊

シモン、シメルレ ピッケル 日本代理店  
ハッド スキー 輸入元  
札幌門田作ピッケル、アイゼン 関西総代理店

大阪市北区老松町 3-12

TEL (34) 7745

# 時 報 第 9 号 目 次

- A.A.C オバリン会長を訪ねて…………… 藤田 軍治 (2)
- 1957年度 冬山合宿報告…………… (4)
  - 1. 双六岳—赤牛岳往復…………… (5)
    - 同 食糧報告…………… (8)
    - 同 装備報告…………… (12)
  - 2. 槍平新人合宿…………… (13)
  - 3. 仙丈岳女子冬山合宿…………… (16)
- 1957年度 春山合宿報告 天狗尾根より五竜岳、爺岳…………… (18)
- 1957年度 夏山穂高合宿報告…………… (30)
- 冬山食糧 特製パンについて…………… (32)
- 冬用テント 製作報告…………… (34)
- 1957年度 一般山行報告…………… (36)
- 岩登りトレーニング記録…………… (48)
- 編 集 後 記…………… (50)

( 本時報に報告された山行は、1957年4月～1958年  
3月の記録である。 )

# A・A・C オバリン会長を訪ねて

篠田 軍治

昨年の秋シカゴで開かれた第三回世界冷金会議に出席の途中クリーブランドに立寄る機会があったので、米岡山岳会のオバリン会長を訪ねることができた。米岡山岳会は会員四百人余というところ、いかにも會弱な山岳会のようであり、シエラクラブ（サンフランシスコ）やコロラド山岳会と比較すると桁違いに会員数は少ないが、それでも米國のA・Cとか日本のJ・A・Cとかいうように画としこの代表的な山岳会とされている。そして事務所は古色蒼然とはしているが、ニューヨークのセントラルパークの東に望々たる門戸を張っている。小こじんは言え、事務所、図書室の外に講堂、ミュージアムをもったものを僅か四百人余で維持しているのだから相当なものである。

A・A・Cはこれだけの会員数だから会員同志が非常に親しい。この日は日本から来たJ・A・Cの会員に対しては全く同じ態度から大抵の場合、自分もJ・A・Cの会員と云っただけで快く歓迎してくれる。

オバリン氏は日本にもカナディアン・ロッキーズのアルバータの第二登山をしたことよく知られている。第一登山は言わずまでも早く一九二四年の横氏の一行と第二登山は戦後である。第三登山の時に第一登山の時に残して来た、頂上のピッケルを持って帰ったこと、それ以来同氏と当時の隊員との間に堅い結び付きができたことは、当時の新聞紙上に相当詳しく報道された。そんな関係で当時の隊員の三田幸夫氏に御願いして録の手紙を出しておいてもらった。

会議の前に二週間の見学旅行があつて、十月二十五日に工場見学後、ナイメガラを見物してバッファロに泊り、翌二十六日フリーブランドに着いた。早速、電話をかけたところと今晚同都合が悪いが明日は午前中は任意だから迎えに行くというところであった。翌日も季節外れの雪が降っていた。前日から雪がちらついていたが、この日は気温もずつと下り、相当な雪が

日曜日のため午後から郊外の濃霧に行つて、見学遊の全員が集つてお祭をやることになつていたので、急に大学のクラブ内に会務変更があつた程であつた。それでも市中は気温が高いためか積もるほどでもなかつたが、オバリン氏の車で郊外のフェアマウンツの山上の同氏宅に行つてみると驚いた。湿った雪がなもう十層も積もつてまじ盛に降っている。

オバリン氏宅はニューヨーク辺の近代的名宅と似てもつかない古風なものであつた。そこには昨夜ヨーロッパから帰つたばかりの御尊父が待つておられた。父君は山には全く無関心だが、オーストリア系統の紳士でクリーブランドでは非常に有名な法律家である。オバリン氏は父の後を継いでおり、妹さんはハウステン隊でK2へ行つたことのある人に嫁している。

朝食の御馳走になつた。カリカリに焼いたパンにメープル、シユガーをつけなにかとすゝめられたので、小庄メープルシユガーはこの辺でも出来るのかと聞いそなほところ、実は自分の農場でできるのだとのこと。相当に広い農場が郊外にあつた。日曜日にはいつも行くことにしている。今日も農場の中で魚釣をするつもりだったが雪が降つてしまったので雉打ちに行くことにした。農務に雉が深山いるとのことであつた。

食後、打ちくつろいで敬談の時、オバリン氏は来月始め渡米L.A.Cの百年祭に出席すること、父も殆んど同時に渡欧するが、全く違つて方面で、共に一月ほどで帰米の予定だが、アメリカでも不用意な登山者の遭難も多くて困るが、日本はどうか、日本山岳会には遭難対策にどんな組織があるかとか、色々と話はずんだ。持参した三田氏のテンシン・ハウスの写真、マナスルの写真と阪大山岳部の写真を差し上げたところ、非常に喜ばれ、日本の学生層が冬山中心であることに注意外趣であつたと共に野呂川の渡歩の写真など、カナディアンロッキーでは我々も全くこれと同じ位と言つていた。

時間の都合で帰しいところまで話を打ち切つて再びオバリン氏に送られて宿に帰つたが、帰りなげに父君が生憎の雪でと如何にも気の毒まうであつたので、自分は日本では減歩に見られない紅葉に雪の景色をクリーブランドで眺めることができたのは、この上ない幸福だと述べたら如何にも嬉しうであつた。

一九五七年度

# 冬山合宿報告

1. 双六岳 ↑ ↓ 赤牛岳 往復
2. 槍 平 新 人 合 宿
3. 仙 丈 岳 女 子 合 宿

# 双六岳—赤牛岳往復

阿 田 博 司

宍 戸 元

春の黒部下廊下横断に成功した私たちは、積雪期の上廊下周辺にすこぶる興味をわいてきた。冬は記録に乏しく、特に戦後には殆んど文献の無いこと、一層魅力を増すものとなった。

そこで上廊下に足をふみ入れる前に、まず冬の赤牛岳、兼師岳に目標をおいた。

第一回は、蒲田川左岸から双六小屋にはいり、ここをベースに途中ACを出しながら、赤牛、兼師(雲の平—兼師沢至由)を同時にニパーティーでアタックしようと考えた。(55年12月—56年1月)ところが、夏ののどか毎双六周辺はうつつて疲つて、徹頭徹尾、猛烈なラッセルと強風に悩まされ、双六から三候蓮草まで放時間を受けたほどだった。更に行動期間三週面中たった二日しか晴天に恵まれず、三候蓮草小屋を十日近くも籠城を余儀なくされたことも痛いして、わずかに、笠、鷲羽岳往復と黒部源流の偵察にとどまった。この失敗から双六周辺のスケールの大きさを知らされるとともに、槍、慮高より高度が

低いにもかかわらず、黒部を通して日本海の雪と風が直接吹きつけ、すこぶる条件の悪いところであるといふことがよくわかった。

今回は計画を赤牛一本にしほり、少互い晴天を生かすため一時間でも行動出来る天気があれば、一時間だけでも行動することにした。双六周辺は、地形の関係からテントを打てる場所は比較的自由に選べるから、食糧、装備もすべし、このような行動に応じるように計画された。次に問題になるのは、大野河次の通過で、これに対しては本文に詳しく書いた。第三にはこのルートでは逃げ道が無いことから、一旦吹雪に閉じこめられると前回のような苦しい経験を繰り返さなければならぬ。それには充分な食糧が必要である。メンバーは阿田(ト)、兼清(装備)、山本(食糧)、野田(食)、米林、平田、広橋(GB)、宍戸(GB)の名で、大野河越まで村瀬(ト)、以下の新人によるサポーターがついた。しかし、これはむしろサポーターというよりは、新人のトレーニングといったものである。他に十一月に双六小屋に四十貫ばかりの装備、食糧を荷上げたが、小屋から先では完全にノンサポーターでやった。将来はポーター・メンバーでもなく、ラッシュでも互い夏山のような形で冬山をやりた

いと思つてゐる。今度の山行は又六小倉から先で、僅かだがそれが実行出来たと思つ。それには食糧の軽量化と、ナイロンテントを使つて行動にスピードを持たせることが必要だ。それと長期にわたつても、計画をくるわけだけの充分な食糧、その意味で、乾燥野菜、水分を極力へらしたパンの研究など、食糧係を中心とした活動も是のがせぬ。なおパンについては神戸屋パン、KK東山氏の協力を得られたことも幸ひだつた。

## 行 動 概 要

12月26日 雨

蒲田川左候のトラック道が、左岸から再び右岸にもどつたところの飯場を借りる。ここに二候の発着所を出来るのみで、トラックの往復は頻はんだ。

12月27日 曇一時晴

大野間沢の末端にかけトレースをづけに行く。夜でも迷わずに歩けるようにするためだ。大野間沢は岳沢に似たカール状の広い谷だ。本流はすつと左岸よりあるので、右岸は広い台地になつてゐる。ブッシュはまだ埋つていない。ルートはこの台地を行くのだが、ブッシュの中のラッセルはかき合わない。輪力

ンは技にとられるし、油断しているとボンッとほまりこんで、足が抜け行くなる。

大野間沢へは抜た岳の岩壁から二本の沢が出ているが、これを渡るべきが最も雪崩の危険がある。ここを過ぎれば、抜た側のスケールは、ぐつと小さくなるから、危険は入る。しかし降れば降つただけ、すべ新雪衣層雪崩のおこるところだけに、油断は出来ない。結局本流は岳麓はまだ埋つていないし、この時期に大野間沢自体がなだれることはないだろうと思つた。

飯場(8:30)―大野間沢出合(9:45)―下の沢出合(11:15)

11:45)―飯場(14:30)

12月28日 晴のち曇

満天の星空のもとに前一時半出発。大野間沢出合附近の迷いやすいところも、トレースがあるから大丈夫。クラストしてゐるので輪ガン返しで昨日のところまで行けた。しかし、ここからはもうはいかない、ラッセルは腹まごである。

乗越ご村瀬のサポーター隊と別れる。彼れが小さくなるまで見送つた。ここで、トラバゲンしてきたスキーをテポ・帰リまごに下力雪がくれば、大いにこのスキーが役立つことになる。一昨年は胸までもぐつて、スキー返しではとても下れたもので



はなかつた。

一ツコブをこすと、もうラッセルはよい。強い西風の中を双六小屋へいそぐ。小屋の附近はいつも風が強い。雪が吹きさらされて土が見えているところもある。双六小屋は雪もほとんど吹きこんでいない。

飯場(130)——大野向東越(12.45—13.15)——双六小屋(17.00)

12月29日 風雪 停滞

12月30日 風雪 停滞

12月31日 風雪 停滞

吹雪をういて、単独行宿(東京学芸大学庄)が三候運華からやって来た。烏帽子から縦走して来たこの二と。このまうな単独行には大胆なのか無謀なのか考えさせるものがある。

1月1日 曇一時晴

十一時、晴れ向がぬえたので出発。一昨年にくらべるとラッセルは少ない。風のわりに雪がふらふらかったのだから。小屋からしばらくは雪道となり進んだが、双六岳と三候運華の最低鞍部から一旦稜線に出た。稜線では輪カンがいらぬいづらいた。

出発が遅かったし、天気もくずれきたので、予定の赤岳ま

さいかずに鶯羽東越に善宮と決めた。

双六小屋(17.00)——鶯羽東越(15.15)

1月2日 風雪 停滞

1月3日 風雪 停滞

1月4日 晴のち曇

午前三時出発。油目で北鎌尾根が白くひかり、すばらしかった。鶯羽岳をまいて割物岳の稜線に出ると風が強くなった。ラッセルは二つでも少い。水晶岳のかなりさ、輪カンをアイビンにかえる。水晶の悪場も雪が予想外に少く、ゲイルも使わずなんなく通過した。あとは赤牛までたんじんとしている。午前十一時、ACから八時間で赤牛岳頂上に到着。

鶯羽東越(13.00)——赤岳(7.15)——黒岳(7.45)——ナカノ

ゴマ乗越(8.30)——赤牛岳(11.00—11.30)——ナカノゴマ乗越(13.15)——黒岳(14.15)——赤岳(14.45)——AC(17.00)

1月5日 雪一時晴のち風雪

午後から晴れしてきたが、初めの原則に従い撤収を始める。だが、三候運華のピエタを越したころからガスがまいてきた。風雪も強くなってきた。稜線から双六のトナバースにかかるとこ

るで、止むまえずテントをはることにした。

鷲羽乗越AC(15.40)―途中ストップ(17.00)

1月6日 風雪のち晴

きよも、午後三時すぎ、ガスが厚く戻ってきた。すぐ近く  
に涎沢岳が見える。双六小屋まで一時間位のところだ。午後五  
時、小屋にもどる。

途中ストップ(16.00)―双六小屋(17.00)

1月7日 風雪 停滞

1月8日 快晴のち曇

春のよう温暖な陽ざしだ。午前九時、小屋をあとに、下山  
の途についた。大野向沢付スノーで下ったが、特にスノーが厚  
ければならぬいよう好積雪ではなかった。槍見温泉についたの  
は午後九時をすぎていた。湯舟で去年からのアカを落とす。

双六小屋(9.00)―大野向乗越(11.30)―大野向沢出合(16.

30―17.00)―飯湯(19.15)―三候(20.00―20.40)―トラック温泉槍

見温泉(21.10)

# 食糧報告

山本信樹

冬山合宿の期間が短い事、アプローチの長い双六小屋まで何  
をおいこち一日ご入ればならぬ事、又サポート隊が大野向沢  
乗越までレカ入らぬから、食糧計画は、秋のボツカを非常に重  
視した。そこで私たちは十一月三十名によって双六小屋に入人  
十八日間の食糧、燃料(四立缶七個)、装備(ザイル二本、  
その他)を荷上げした。

従って食糧は十一月から正月まで双六小屋に貯蔵される事に  
なり、腐敗、湿気、鼠、盗難に対する対策を十分考慮せねばな  
らなかつた。又、行動の面では合宿期間中(十二月二十五日  
一月七日)の突動日数を五日と予定したので、少しの晴れ間ご  
も十分活動出来る様、調理の簡便化を考えた。

以上のことから朝食には特別に工夫されたパンへ。パンにつ  
いて(左参照)を安全宿期間を通じて用いた。朝食の副食には  
紅茶、スープ、ミルク、バター等を配し、

昼食は行動中はクランッカー。停滞中は、クランッカー、中華

は、餅、パン、その他を用い、停滞中の昼食には必ずスープの類を配する様に心がけた。夕食は、餅と中華を食卓中心にしてアタック前夜の夕食にのみ特にアルファ米を用いた。長期向の山行では、どうしても主食は「飯」ということが、全員の最大公約数であったが、米の重量、それを調理するに必要の大量の燃料から考えて、不可能なところだった。それに対し、アルファ米は軽量で、調理も簡単ではあったが、価格が高いため、アタック前夜だけに使用した。しかし、双六小屋では断然充分使えるから、米を、安戸、岡田先輩の助言によって五升だけ、特に双六小屋に荷上げた。夕食にも、朝食と大抵同様のスープ類を副食として用い、それぞれ二、三の組合せを作り、これを行動、停滞、その他種々の条件とにらみ合せて組合せた。以上が食料献立の骨組みで、こまかい数字は表による。

### 冬山合宿のために試作した食品について

#### 一、乾燥ホウレン草

特に初めての試みとして乾燥ホウレン草を用いて見た。新鮮なホウレン草を水洗いしてから沸騰した湯の中にサッと浸し、軽くゆでて、水を十分絞った後、細引を利用して細のより目に

振を通して日向で乾燥する。重量は、生の時に三割目であったものが、乾燥後は三百グラムなり約十分の一程度の重量になる。これを五十グラムずつポリエチレンの袋に梱包した。

調理は簡単で、十分簡潔沸騰すれば十分柔らかくなる。結構旨みも残っているし野菜らしさもとめて好評を博した。冬、春の野菜には適していると思われる。しかし、その製造過程から考えて、栄養価が新鮮なものより、ずつと低下していると思われるが、この点をもう少し改良すればより良いものも得られると思われる。

他にマックスについても試みて見たが、これは失敗した。

#### 二、梱包

梱包は第一に合脂の形式がラッシュに近い形式であるためと第二に天候の変化に耐じた行動をとれるように食糧の梱包は、一括して石油缶の中に入れ、どの石油缶を開いても、必要を食糧が一式はいつているようにした。唯、米とパンは石油缶の不慮と、そのまゝでも貯蔵にたええると考えて、パンはボール箱、米は米袋のままに貯蔵した。しかし五升の水は全部、パンは総数三。梱のうち八五個が籠に食われてしまった。これは八人の三日ないし四日分の食料である。全部で十八日分しか残

い、食料のうち三日分を失つては計画は明らかに食料の面でも  
 ずれてくる。特に逃げ道がない赤牛アタックに於ては致命的と  
 さえ言い得るのである。幸いに、どこかのパーティーが残して  
 くれたビスケットその他を発見し、追加に持つて上った餅とで  
 何とか埋め合せが出来たので、計画には大きな影響を与えな  
 った。

他方、最近相次いで耳にする秋に荷上げた冬、春山台宿用  
 食料の山小屋での盗難についても相当気を配つたが、幸いこの  
 方は無事な何よりであった。しかし、こういふことが、実際に  
 あるとすれば、甚だ残念な事である。

鼠に対しては、食料を完全に石油缶の中に入れる事によつて  
 免れられるであらう。

2日	1月1日	31日	30日	29日	12月28日	日
越東羽葛	双六小屋	停 滞	停 滞	停 滞 (8名)	新 穂 高	朝
パン 16個 バター2個 ポタージュ ジャム、バター	パン 16個 紅茶 バター1/8 lb. 5袋	パン 16個 コンソメスープ	パン 16個 ミルク	パン 16個 紅茶 バター1/8 lb.	米一入当り四合 カレー 豚肉 四〇〇g ジャム、玉ねぎ ミンチ、ソーセージ	
停 滞	双六岳中腹	停 滞	停 滞	停 滞 (8名)	大 沼 栗 越	昼
クワッカ 5本 紅茶 チー1/8 lb. 5袋 レモン1/8袋	クワッカ 3本 ジャム レーズン1/8袋	クワッカ 5本 味噌汁	クワッカ 2個 オニシライス 8袋 オニシライス 8袋 味噌汁	クワッカ 2個 オニシライス 8袋 味噌汁	パン2コ(1人当り) バター1/8 lb. チー1/8 lb. パン2コ バター1/8 lb. (2人当り) チー1/8 lb.	
停 滞	葛東羽双	停 滞	停 滞	停 滞	双六小屋 (8名)	夜
中華ソバ 4袋 モチ 8個 コンビーフ 一缶	中華ソバ 4袋 モチ 3個 コンビーフ 一缶 乾燥野菜	中華ソバ 4袋 味噌汁・ワカメ 乾燥野菜	米一入当り二四合 公入りカレー ラッソヨウ	米一入当り二四合 味噌汁 ソーセージ 福神漬	オニシライス 8袋 パン2個 味噌汁 乾燥野菜	

冬山用食料表 (全量) 8人×18日分 (但し行動5日 残り停滞とする)

品目	数量	食数	野菜	ドロッパ	100 匁	
主食	パン 300	150	野菜	ドロッパ	100 匁	
(400匁)	パン (神戸産試供品) 一箱		野菜	ドロッパ	400 匁	15
	水 5升	33	野菜	ドロッパ	1200 匁	
	米 34袋	34	野菜	ドロッパ	1000 匁	
	クラッカー 70個	100	野菜	ドロッパ	10 箱	10
	あわおこし 70 "	16	野菜	ドロッパ	3 個	
	中華ソバ 20 "	40	野菜	ドロッパ	2 匁	
	餅 5升	50	野菜	ドロッパ	100 匁	10
肉類	コンビーフ 6	3	野菜	ドロッパ	2 匁	2
	サバカンヅメ 16	16	野菜	ドロッパ	2 匁	4
	牛肉 500匁		野菜	ドロッパ	4 匁	
	豚肉 500匁		野菜	ドロッパ	100 匁	
乳製品	チーズ (1/2lbのもの) 8個	8	野菜	ドロッパ	4 匁	4
	バター ( ) 6個	6	野菜	ドロッパ	8 匁	8
	スキムミルク(大) 5個	5	野菜	ドロッパ	2 匁	
スープ	即席カレー (10人用) 2個	3	野菜	ドロッパ	2 匁	
	ベルカレーウ (8人用) 3個	3	野菜	ドロッパ	1 匁	
	ポタージュ (10人用) 4個	5	野菜	ドロッパ	1500 匁	
	コンソメ (30人用) 2個	2	野菜	ドロッパ	1 kg	
干菓	サマ味淋干し 40	3	野菜	ドロッパ	2 匁	
	百ざし 200	5	野菜	ドロッパ		
惣食品	スマラメル 20	5	野菜	ドロッパ		

8日	7日	6日	5日	4日	3日
双六小屋	停滞	双六岳中腹	鷲羽乗越	鷲羽乗越	停滞
パン コンメス スープ 16個	味淋干 1/2 Lb	乾燥野菜 コンメス スープ 8個	パン コンメス スープ 16個	サバカン バター 1/2 Lb	パン 紅茶 2個
大沼乗越	停滞	双六岳中腹	鷲羽乗越	赤牛岳稜線	停滞
クラッカー 5本 ジュラム	ジュラム 1袋	クラッカー 5本	ジュラム 1袋	ジュラム 2袋	ジュラム 5本
総見温泉	停滞	双六小屋	双六岳中腹	鷲羽乗越	停滞
ハム	即席カレー 8袋	中華ソバ 8袋	米 10升 ワカメ 味噌汁 コンビーフ ニ缶	モチ 16個	オニシロイヌ 8袋 モチ 8個 コンビーフ 1缶 コンメス 1缶

# 装 備 報 告

兼 清 喜 雄  
米 林 外 茂 男

装備については特別同新しいものは別にない、各部の装備が老朽化して来ていたためか毎年の装備の新調を行なった。又軽量化についても多少心がけた。双六小屋入りを簡単にするため秋山の荷上の際に多くの装備を双六小屋を荷上しておいた。新調装備としては、ビニロン製四人用ミッド型テントを先輩諸兄の御尽力により新調することが出来た。この詳細は別項冬用テント製作報告を参照されたい。ヌバーナーは秋からプリムスラヂウスの各中型を購入し、エアマットも揃えた。

ザイルは黒弦の懸場に備えて、テリレンザイル(9mm)30m一本、マニラ麻(12mm)30m一本、補助ザイル(8mm)30m一本を携行した。その他の装備は別項の装備表を参照されたい。新しい試みとして行なったことは、ガソリンをバーナーのタンクに入れる際に、従来漏斗だけで入れていたのを、たらしもれによるロスと引火の危険性が多かったが、今回よりサイフォ

ンの理を応用しゴム管でガソリンをバーナーのタンクにうつした。その結果ロスが減り、ガソリン無駄がなくなつた。ガソリン缶としてはムシ缶を用いたが、夏秋の経験により、口のパツクを完全にするために、口をハンダで固めその上にかたをかぶせた。これだと運搬中のもれもなく、二ヶ月の間の蒸発による損失も全く良好であった。

## 総 会 報 告

本年度総会は5月31日(土)六時より記念館前の喫茶店ドリアンにて開催された。藤田先生はじめ大島・加藤・久保・実戸・木村・抱・立花・空申・西川・村瀬・森川・一山の諸先輩が出席され、現役とも四十数名という盛況であった。藤田先生のあいさつに続き昨年年度活動報告、会計報告、本年度新役員紹介、会場作戦についての討議、現役紹介等が行われ、最後に昨年度台座のスライド映写が行われ午後九時散会

品名	数量
テント	1
ピロン	1
ザイル	1△
テリル	1
補苧	1△
ハンマー	2△
カラピナ	3△
ロックハーケン	4△
アイスハーケン	4△
エアーマット	7
カポックマット	1
ツェルト	2
スコップ	1△
バーナー	3
ローソク	40本△
コッヘル	2
ナイフ	1△
ノコギリ	1△
グランドシート	1△
ナベ	1△
シヤモジ	2△
タワシ	3△
ガスアト	2△
ロー	3
ゴム管 (1.5m)	2本
修理具	1組△
新聞紙	若干△
赤旗	1
ガソリン	28ℓ△

△印は秋に荷上  
消のもの。  
(双六小屋へ)

# 槍平新人合宿

(一九五七・十二—一九五八・一)

## 記録

村 笠 瀬 泰 弘  
田 村 俊 秀

冬山の様な大きな合宿に、いきなり新人を参加させることは種々の問題がある。それで例年細野がスキー合宿を行い、雪に慣れさせることにしていた。しかし冬山と同時に行われるスキー合宿に現役のリーダーが参加することは、部にとっても

リーダー自身にとっても好ましいことではない。事実毎年適当なリーダーが得られず、意頭蛇尾に終ること多かつた。そこで花やかで誘惑の多いゲレンデスキー合宿よりも、新人に小さな寒い冬山合宿を行ふ必要を感じられ、今回の槍平合宿となった。合宿の前半は赤牛隊と行動を共にし、大野向乗越までサポートし、後半槍平に入った。MEMBERは村瀬(シ)以下大島、笠松、木村、田井、玉井、田村、尾藤(0B)、駒平(0B)。

12月29日 5:00起床、小雪交りの曇天。8:10 中崎橋附近の飯場発、前日のラッセルの疲労甚しく、余った食糧が異常な負担となり、トラックを拾う。10:30 右俣出合発、左岸のト

ラック道をつめて、樹林中の裏道に取付く。ここから関学先寇隊の、裏道をほばたどったと思われるラッセルルがあり、地理不案内の我々には大変な助けになった。けれども行程歩らず、二三の着不調を訴える。14.00 白出口、ここを食糧三日を減して他はテポすることにし、急場をしのいだ。進むにつれ谷は急峻となり、せまり来る夕崗と共に降雪激しく、新雪は踏跡を消し、事実上のラッセルで消耗する。右手に岩小屋を発見、関学の先寇(ここを)ビブークした模様。16.25 滝谷出口、陰惨そのものの風物に新人連荒涼とした面持。寒気と疲労に沈む一河を叱咤してラムア頼りに強行。樹林が急に切れて小屋の灯を照る。時に18.00、ラッセル付ければルート設定だけで多大の消耗をなして、ビワークも余儀なくされたとあろう。計画の細部の相違がここへな時に露呈する。関学の方がテルモスの茶を我々を迎えてくれた。20.00、尾藤・関本両氏相ついで風雪の中を到着、両氏共疲労の影もない。新人連には良い割取だろう。小屋はたちまち湯気になった。

12月30日 曇、7.35 起床、村瀬以下新人、(丁)本池の荷を取りに、一方、OB 両氏は槍平をつめて懐察。

12月31日 雪、午後の小康に、前日OBが見定めてくれた小屋

から一時間の小斜面に向う。両OBの指導でスキーの基本を一通り。同所でテントを乗り雪中露営の訓練とすることにし、両OB 大汗をかいて地味らしをしてくれたが、支柱を小屋に忘れる。OB 氏怒り、次いで爆笑。夕食後被火を囲んでOB の物語、山岳部の沿革、恐怖のビバーク、諸先輩の豪傑伝、心暖まる一夕であった。

元旦。朝方の風雪11.00に至り突然晴上る。遅きに過ぎるが予定通り槍に向う。尾藤氏残念そうに後線を引いて下山。13.10 登シールをつけこの相当のラッセルだが、久振りの晴天と白銀に輝く槍穂、笠岳にファイトを燃し、大野南乗越展望される地笑で昼食(14.40)、行手に危難乗越、あと三時間付かろう。天候悪化の兆、下山と決す。帰路、山スキーの醍醐味には程遠く慣れぬ急斜面に新人難滞す。15.30 帰着、今夕テントの関本、大島、田井が入る。アタックの日は、天候の如何に拘らず、一切の用意と共に待機すべきである。

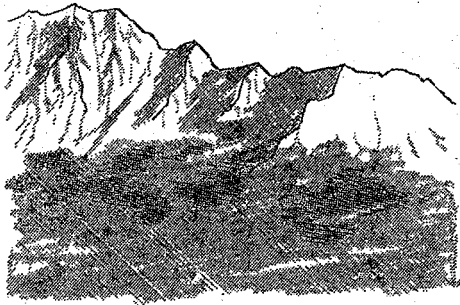
1月2日 風雪 停滞 テント交代(村瀬、笠松、木村)食糧大量に余る為、食い放題とする。

1月3日 風雪をついて関本OB下山、テントの交代に行く。今夕は村瀬、佐藤、田村、夕刻より気温急激に下り、20°C突破



快晴となる。月光の穂高、滝谷、妖気に満ちて凄絶である。

1月4日 (テント) 寒さを眼がさめる。バーナーをつけるとたちまち暖くなる。消すと音を立ててテントは凍る。ほんどもないことだが、新人には大きな心理的恐怖だ。(小屋) 最低温度計寒さでこわれていた、 $-25^{\circ}\text{C}$ 。快晴、本隊は勇躍アタックに向ったであろう。然し我々は下山せねばならぬ、新人の気力はもはや限界である。函雪の後送隊と入れ代りに1120小屋に別れを告げる。16:30 槍見温泉に至る。夜線は荒療旅となった。



### 一九五八年度役員

一九五八年度現役のリーダー会々ムバーは次の様に決定しました。非常に遅れましたが、この機会に発表致します。

チーフ 山本 信樹 (工学部 機械 三年)

兼 清 喜雄 ( " 精密 三年)

野田 憲一郎 (経済学部 三年)

平田 彰 ( " 三年)

米林 外交男 (工学部 応化 三年)

# 仙丈岳女子冬山合宿

(一九五七・十二—一九五八・一)

## 一 山 幸 代

此迄、阪大山岳部に於いて、男女部員は、ほとんど同一行動を取って来たが、今年度になって、一応女子部員は、別個の行動を取るようになり、涸沢での夏山合宿は、その主旨に添ったものであった。冬山合宿も同じく別個のプランのもとに行われた。

現役女子部員のメンバーは殆んど実際の登山活動の機会に恵まられなかった。一年生二名、卒試・就職が多忙を極める四年生二名であったが、冬山の性格上、一年生はスキー合宿に加わって貰いたい、東京の三枝OB、松木OBの参加を依頼してのメンバー四人の予定でプランを進めた。初歩的で冬山の候補地はOBの方からも挙げてもらい幾つかあったが、アプローチや天候から割出した所要日数、ベースとして小屋の使える所、しかもなるだけ高い所を、といった要件にかなった所として最終的に送るだけの南アルプスであり北沢小屋をベースとして主目標を仙丈岳に置

き、余裕があれば甲斐駒、アサコの往復もする事とした。

十二月の初めに偵察及びポッカを引き受けて下さった松木OBが都合により合宿には参加出来なかつたので、結局三人で行する事となり十二月三十日、東西から伊那北に落合いバスで戸台に向った。

〔メンバー〕 (リーダー) 三枝 礼子 (OB)

(食 糧) 森川 和子

(装 備) 一山 幸代

〔行動記録〕

12月30日(豊)

戸台(9:00) — 丹溪山荘着(12:00) 発(1:30) — 平(2:15) — 北沢峠(4:15) — 北沢小屋着(4:30)

戸台川に沿って進むと丹溪山荘では殆んど雪もなく、秋山に入る感じ。睡眠不足からの疲れもあってコンディションの良くない者もあったが、丹溪山荘で休憩の後、預けがあった氷と野菜を加え、パツキングを終えて強行。八丁坂の下部はスケートリンクのように凍っていて一歩々々足元に注意しなくてはならなかつた。ベースに予定していた温泉小屋は使えまつにも短いので番人の入っている長筒小屋に変更する。

12月31日(晴)

小屋窓(6.40) — 三合目(7.50) — 小仙丈(10.15) — 小屋着(12.10)

今度の合宿の主目標である仙丈に向う。森林の間はまるで春山のように晴朗だがアイゼンをつけて稜線にかゝると雪を吹きつける風が烈しい。ともすればバランスが奪われがちであり三米程前にいる者に掛ける声も吹き飛ばされこしまう。その上小仙丈の附近をいくと二人がプロテクトの不十分を竹藪が顔面に凍傷を起しかけたし全員揃うは初めてなめで慎重を期し引き締す事にする。

1月1日(快晴)

小屋窓(7.20) — 三合目(8.20) — 仙丈岳ピーク着(10.50) 窓(11.30) — 小屋着(11.30)

今日(こ)は心と意気込んでプロテクトにも十分意を払う。小仙丈からの稜線はいささか長い感じもし、同時にその緊張を終止するのが惜しいような気もする頃最後の登高となる。快晴に恵まれたピークから展望する雪の中央アルプスは遠い時代の夢のようにリリーフされている。

1月2日(風雪)

小屋窓(7.30) — 仙水峠着(8.55) 窓(9.05) — 小屋着(9.50)

明け方から雪が降り続けているが偵察を兼ねて仙水峠まで行く事とする。次第に風雪気味と身づくろいの中を仙水峠に着く。げた／＼震えながらテルモスの紅茶を呑む。分ばかりの休憩の向に先刻のラッセルは疎形もない。三枚目は御自慢のナイロンのオーバー・ズボンの威力を先頭に立って、腰迄もぐりながらラッセルを続けて下さる。私達はさすがにOBだとそのリーダーシップにともつかず、そのオーバーズボンにともつかず、しきりと感心する。

1月3日(風雪)

停滞

1月4日(快晴)

小屋窓(7.15) — 仙水峠(8.05) — 駒連着(9.20) 窓(9.30) — 六方石(9.50) — 駒ピーク着(10.50) 窓(11.30) — 六方石着(12.20) 窓(12.45) — 駒連着(1.00) 窓(1.07) — 仙水峠着(1.30) 窓(1.37) — 小屋着(2.00)

甲斐駒に向うパーティも幾つかあり私達は忍びこいたよりも容易にピークに立つ事が出来た。往路は駒(岩稜を直登、帰路はピークと懸崖支天の鞍部からトラバースする。

小屋に帰つてからは野呂川に沿つてスキー沢あたり迄散策を

楽しむ。

1月5日

小屋発(七〇〇)―八丁坂着(七四五)発(七五五)―丹溪山  
荘着(八十五)発(八二〇)―戸台(一〇三〇)

女子部員のみによる初めての初歩的な冬山合宿であつたが、

男子部員に依存的だと評されがちだつただけに、私達自身の手  
で計画を立て、私達自身の力で、初期の目標を達成し得た喜び  
は一しおである。この合宿によつて学んだ事や反省すべき事は  
多いけれどこの経験を生じて今後とも自主的な山行をなしてい  
たいと思います。そのためにも技量の未熟な私達に男子部員の方々  
の適切な指導と助言をお願いします。



一九五七年 度 春山合宿

## 天狗尾根より極地法による

## 五竜岳および爺岳

(一九五八・三)

兼 清 喜 雄

冬の赤牛岳へのラツシュ攻雲が成功裡に終り、四年部員がい  
なくなり部は實質的に二年一年部員で行動しなければならな  
なつた。

計画がはつきりと決つたのは一月に入つてからであり我々の  
積雪期の山の経験は二年部員の一部だけであり多くの一年部員  
を動かす事が出来、しかも二年部員にも満足して行動出来る所  
としてホーラによる鹿島槍天狗尾根から五竜を選んだ。この尾  
根は、五年の冬に合宿の行われた東尾根の上部から分れてい  
る尾根で途中に数ヶ所の悪場があり頂上までテントを上上げる場  
合相当に困難が予想された。又合宿の決定が非常に遅く文献に  
よる知識だけであつた。

具体的には丸山小屋及びB.H.とじこを二〇五〇にナイロニ

写テントと雪洞で建設しC2を北俣コル附近にビニロンテントと雪洞でC3を北槍頂上又は釣尾根にナイロン一号を設置する事にした。天候は一週間で3.5日動けるとして、計画日数十八日で行動日九日としアタック前後で計画に中を隔たせる事にしアタックはC3設置俵いかなる場合も五日で放棄する事にした

今春は天気がハ山中良好で目標の五竜アタックが成功裡に早く終つたので次の日すぐにC2より爺ヶ岳アタックを出しこれも成功した。又今度の計画ではC1・C2で雪洞の使用、二食料準備の完全パツキンケ（キヤンプ毎）

三桁上げの合理化（各キヤンプ毎に荷物及炊事等分）以上三つを完全に実施した。

参考文献としては友人、鶴翔山岳会「鷹翔」一〇一号及び吉田二郎著「鹿島槍研究」を参考にした。

メンバー

兼清吾雄(山) 山本信樹(装備) 野田憲一郎(食料) 米林  
外茂男(装備) 平田彰(会計) 大島浩 田村敏秀 佐藤  
茂 笠松卓函 広瀬真雄 大工原泰 村井忠雄 平野憲一  
黒田桐郎 横尾由松 岡田博司 広橋茂(06) 西川元夫(06)

### ○行動概況

3月17日 十八時九分大阪発の列車で本隊十五人出発、食料が一斗カントカートンボツクを全部で三十二ヶ約六十貫であった車の兼換時荷物の数が多いため非常に苦勞した

18日(晴後雪) 源坂でバスから降り出され、荷物を約半分民家にあずけ他を全員でかついで出発、途中鹿島で狩野さんの所により丸山小舎に入る。岡田さんが後から来られた。丸山小舎はあまり大きくなく市大が入つており一鉢でどうにか、全員はこれ様の状態であった。

19日(晴後高雲) 十人がC1建設に向い。6人が源坂に荷物を取りに下つた、天狗尾根は今春多くのパーティが入つており天狗街道と云えるほどの道が出来たぐらいでほとんどピラツセルがなかつた。C1は最初の予定では二〇五〇のあたりであったが雪洞の大きなを作ることを考慮して一八〇〇の附近の林の中に設置しナイロン二号は使用せず雪洞のみとし阪大式で北側の斜面に一つ三人用(後に炊事用)のを作り今一つは出来るだけ低つておいた。C1にはG1までのルート工作隊として、岡田

山本、笠松が入った。C1へのサポート兼清、平田、大島、佐藤、田村、本瀬、平野、源治へは野田、米林、大工原、横尾、村井、黒田、西川、大坂宛

20日(小雪後晴) 今日C1へC2建設のため五人が入る。又ボツカも今日と明日でC1以上のもの及全部C1へ上げねばならぬので今日は重要な日である。出発前に西川、平野が到着され全員十四名で出発する。九人のボツカ隊であるので相当量の荷物が今日一日で上る。C1では西川、平野の指導により約十人用の大きな雪洞が完成した(BH11)、兼清、平田、野田、大島、田村、C1隊はC1予定地北侯のユルまでトレースし、オニクロアールにフィックスを行いC2の位置としては北侯のユルに近い所がなく天狗の鼻が適当地である事を偵察して来た。又オニクロアールは予想よりも長くフィックスは共に上半分だけが行われており、明日下半分を延びたさねばならない。本瀬、大坂宛

21日(晴) C1建設の日である。非常に暑い太陽の下を八人のC1隊員が天狗の鼻を越して雪のクローアールを越しナイフリツデ

を廻り急斜面をあえぎあえぎ登つていった。C2は天狗の鼻の一番先の、にじニコ Tent が張られ雪洞が一部掘られた。九人はこのりの全荷物を持つて全員がC1に入った。C1では雪洞の居住性を良くするためにあちこちと手がくわえられた。オニクロアールのフィックスでフィックスザイルのほとんど全部を使用し、C1-C2間に多くの雪場があつた場合の事が心配されるが明日の偵察にまかせざるにす。平野、本瀬、佐藤、山本、野田、笠松、大島

22日(曇) 入山して今日で五日目である。この様に天気が続くと計画は順調にすすむが体の方はそろそろ停滞を感ずる様になつて来る。C2隊はC1までをトレースし途中ニヶ所岩場にフィックスをしC2としては北麓頂上よりも釣尾根の方がよい事を認めた。一方C1からは十人のサポートのもとに四人のC1建設員とC2用の荷物がC2に全部入り、C2の荷上げに關する仕事は終つた。又C2の建設までの一時的な四人用の雪洞が昨日一部掘られていたが今は完成しC1から上つて来た四人が入つた。C1先鋒隊の偵察の結果ニヶ所の岩場もそろそろ悪くはなくなり明日の荷上げはかなりスムーズに行くと云う予想が立つた。

(C1-C2 兼清、米林、田村、本瀬)

23日(快晴 強風) アタツクへの最後のステツアCII建設の日である。非常に風が強く北候のユルから上の一連の燃料面を登る四名のCII隊員及び四名のサポート隊員は非常に苦しいめられる。がしかし昨日のトレースを岩場のフイツクスによりスムーズに済み、午後一時には釣尾根のCII予定地に着いた。マCIIの十人も早朝CIIを出発し北槍頂上を全員ふむために上つて来たが小舎岩の所で体の調子の悪い二人左のこして他は全員釣尾根の頂まで上つて来た。CIIは釣尾根の一番北槍に近い所で冷沢割にナイロン一号が張られた。

CII(アタツク隊) 山本 野田 米林(サポート) 田村  
CII隊 兼清 広橋OB 笠松 大島  
CII隊 平田 佐藤 広瀬 大工原 横尾 村井 黒田 平野  
西川OB 岡田

24日(晴 微風) CIIのアタツク隊は五竜アタツクに成功した。雪の調子によつては一日で往復不可能なこの稜線も非常に快適に歩くことが出来た。

(アタツク隊参照)  
アタツク隊が五竜をアタツクしている間CIIよりCIIの田村の所に

連絡に行き北槍頂上CII間の発光信号と明日のCII撤収を打ち合わせし爺アタツクの事を伝えた。CII隊員とCII田村は南槍頂上を往復した。夕刻雪がしまつてからCIIよりCIIに連絡に佐藤、広瀬が上つて来たので発光信号の事と明日のCIIよりのCII撤収CIIからの爺アタツクを伝える、爺アタツクはリーダーの兼清が体交こわしたため広橋OBに行つてもらう事とし、広瀬、笠松、大島である。

西川OB 岡田OB下山

25日(曇後吹雪 ガス) 天気はあまり良好ではないがこの一週間の調子から見ても今日も一日保つかもわからないので一応アタツクを出す事にした。アタツクの隊は帰途南槍の登りから吹雪に出会った。

これについてはアタツク隊報告を参照されたい。

一方CIIの撤収はCIIから6名のサポート隊員が上つて行き、計十人でCIIまで撤収、なほ天気悪化のため、爺アタツクのサポート隊として二年部員の山本、野田、米林、平田は爺アタツクが帰つて来るまでCIIにとどまつたが無事アタツク隊が四〇〇に

帰つて来たので山本 米林 野田はCに下りDは爺アタツク隊と平田、兼清の五名となつた。なほ爺アタツク隊はE面下のアイツクスザイルをはずして下つて来た。アタツクは成功裡に終り後はE以下の撤収だけである、一応背肩の荷が降りた様な感じだつた。平野 黒田 下山

26日(晴) Cよりサボートに四名が上つて来てDを撤収し、オニ、オークロアルのフイツクスザイルをはずしてEまで下りDでEをほとんど撤収して待つていた他の部員と一緒になつてEの丸山小舎に降りた。今日は雪の状態が非常に悪く足もとの雪がスノーボールとなつて落ちて行くのでそれが表層ナタレとなるという状態でオークロアルは撤収して来る寸前になだれていた。今日は遅くまでかかつて用意しひさしぶりに米の飯をたべた。

27日(高曇) 毎日行動が出来一日も停滞がななくしたが、つて食料等は半分はあまつてしまひ帰りにも行きにもおとらぬ荷があつて丸山小舎から源流までくまひめられた。

あとがき

今度の山行を反省して見ると知識の不足による準備の不健全さもあつたが天気にもめぐまれ頼調にキヤンプ友設置出来、爺か五竜が一方だけを考えていたアタツクも両方行く事が出来、今春の目標であつた新人部員の雪山に對してのトレーニング及び二年部員のリーダー的な行動のトレーニングの目的は十分に果されたと思つてゐる。計画実行に對して不備な点は多くあつたりと思うが皆よくボラーの方式にしたがい協力して動いてくれた事により計画が成功したのだと思ふ。又三年部員が欠けてゐる所をOB多数の参加により多く教えられる所があつたと思ふ。

時 間 記 録

3月16日

6:35 大町 7:10 バス 7:35 源流 8:30 — 11:10 鹿島部落 11:30 — 2:00 丸山小舎

3月19日

5:00 起床 — 8:30 出発 — 10:15 取つき — 12:00 CI 12:20 — 5:15 取つき —

6:20 小舎着

9:25 発 — 10:05 鹿島 — 11:35 源流 1:10 — 4:00 小舎着 5:15 — 5:55 鹿島 6:05 —

7:05 小舎着

3月20日



5.00 起床(炊事) 7.30 発 11.15 取つきー 2.15 CI着ー CI 発 3.10 ー小舎

3月21日 CI↓CI

6.00 起床 8.15 CI 発 ー 11.15 CI 3.50 ー 4.45 CI 着

3月22日 BH↓CI

6.00 起床 ー 8.30 発 ー 11.20 CI 12.30 発 (1.35) ー CI

C2 ↓ C3

ー 3.45 C2 着

3月23日

5.30 起床 ー 7.00 発 小舎岩 ー 10.55 オニの岩場 上 ー 11.40 荒沢の頭 12.30 ー 13.00 頂

上 ー 1.00 釣尾根 CI 3.00 頭 ー 3.40 オニ岩場 下 ー 4.10 C2

CI ー CI

3月24日

五竜アタック

CI ↓ CI ー 南槍 10.00 発 ー 11.50 オニ岩場 下 ー 12.10 オニ岩場 上 ー 12.20 荒沢の

頭 12.15 ー 10.5 北槍 上 ー 1.40 C3 発 ー 1.55 南槍 上 2.15 ー 2.30 C3 3.00 ー 3.15 北槍 上

ー 3.25 オニ岩場 ー 3.40 小舎岩 ー CI CI ↓ CI

3月25日

五竜アタック 6.00 CI 発

CI ↓ CI CI 発 ー 8.00 CI 2.00 ー ー 1.30 C2

ー 4.00 CI 着

# アタック隊 報告

## ◎ 第一次アタック行 (五竜岳)

朝四時半頃起床する。テントキーパーの田村はぐつすり寝ていて、山本が起したらしい。急いで朝食をとり、オーバーシューズ、アイゼンなど身仕度をしてテントをどび出したのが五時十五分だった。大町あたりも昨夜美しく見えた灯も今はなく静かに眠っている様だ。ヘッドライトをともし釣尾根からすぐ黒部側の急斜面を明りをたよりにおりる。岩の上にはさらさらの雪が積っておりもぐるつもりで足を察込む。がちんとはねかえってきても甚だ堪定が悪い。少し下つたところから山本がスリップルし約30分程流されたが争なきを得た。10分程下つてから今度ハトラバースをして稜線へ出る。このあたり雪は表面が薄くクラストしており甚だ歩きよい。快調にはして30分程でキレットへ着くキレットは心配していた程のこともなく鹿島側は裏道が出ており。どん底から五竜側は急な雪の斜面をよじのぼった。キレット小屋には九州大学の方が入つておられ附近にはザイルフイックスがありそれに助けられた。それから五竜返は例の

とおり凹凸の多い岩と雪のミックスした稜線だ。天候は晴れてはいるが余りすつきりしない空の色で匂は高雲の林だった。信州側にはり出してゐる雪庇はもう根元に割れ目が入つてゐる。

五竜迄大体トレースがあつたので非常に楽だった。五竜岳頂上10時過ぎ。帰路はかなりばり釣尾根のテントに午後3時帰着

○ 第二次 アタック行 (爺岳)

(氷林)

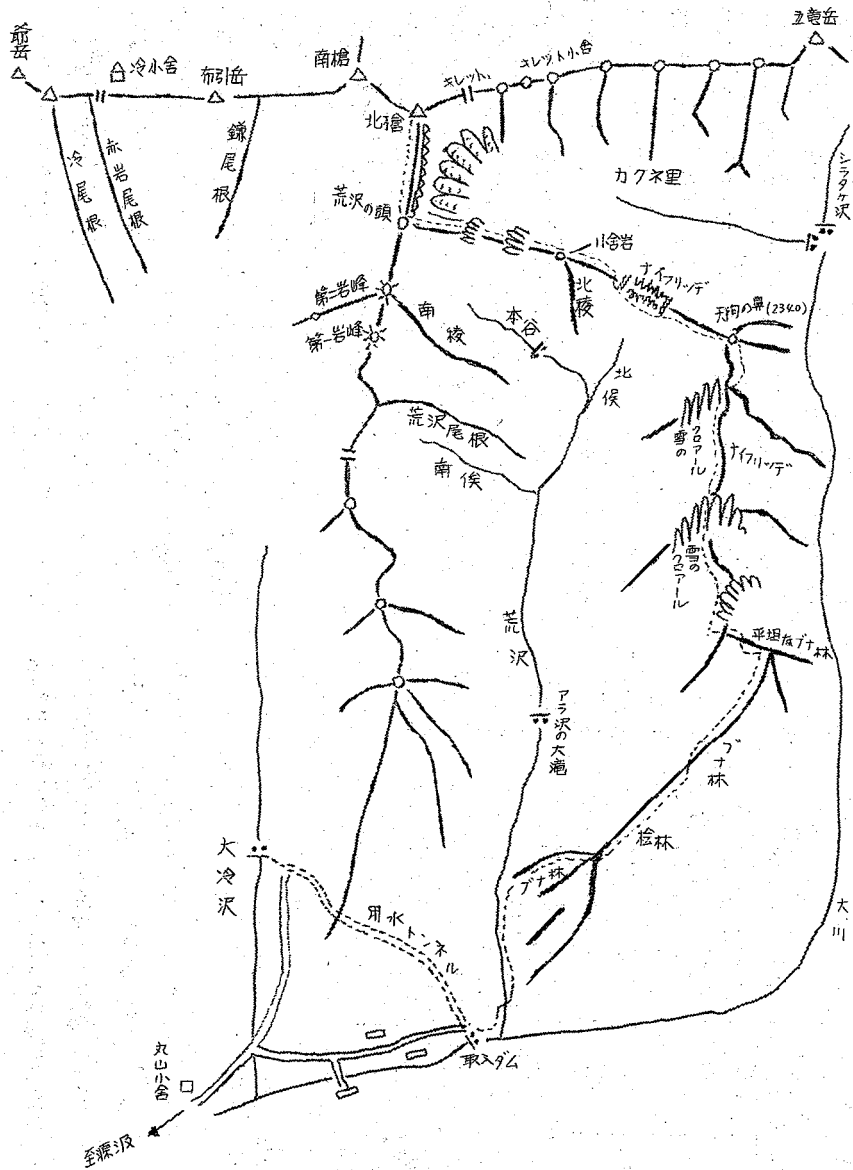
高雲 4:30 起床、6:10 出発、7:15 荒沢頭、7:30 北槍  
 8:08 南槍、裂風有り、9:00 冷池小屋、10:20 爺岳頂上、往  
 路は南槍から夏道が良く踏出し、加之トレースがついていた  
 が、爺頂上附近では消失してゐた。ルートは雪庇を警戒して黒  
 部側の林寄りに取つた。風強まる中、ツエルトを被つてつま  
 しく昼食をとり、11:20 出発、12:00 冷池小屋、ぐんぐんと匂  
 にかす。13:30 南槍ケルン。ガスの流れが繁く、北面視界なし  
 北槍かすかに見え渡り覚ゆ。

釣尾根にかゝる頂より風雪となり僅かに北槍の赤旗が見えか  
 くれする程度で頼みのトレースは新雪に埋れ不安を感じる。14  
 15 Ⅱテント地、撤收済。匂にかすが懸れば、後の天気は30分  
 後に崩れる。と、いふ話を改めて感い出す。やせ尾根から思はず

行 動 表

	BH	C1	C2	C3	爺 岳
3月 18日 晴後曇	→				
19 晴後曇	6 →	3 →			
20 小後晴	1 →	5 →	3 →		
21 晴	1 →	9 →	4 →		
22 曇			4 →	4 →	
23 快晴			8 →	4 →	
24 晴(空)	← 2		4 →	4 →	爺
25 曇(午後)	← 2		3 →	3 →	爺
26 晴	← 9		5 →		
27 高曇	← 11				

足を踏み出しそうになるが奇妙に危険感がない。荒沢頭からの  
 広い雪面は風雪の中の赤旗だけが頼り。  
 16:00 Ⅱに帰りつく。天候を心配してキヤブテン以下Ⅱの  
 ムムバーが我々を待つていてくれた (爺岳)



天狗尾根 概念図 (吉田二郎氏 鹿島槍研究より)

# 食糧報告

野田憲一郎

春の天狗尾根は現役部員にとつて初めてのポーラーだった。

だから、ポーラー運送に際して食糧計画を立てる上でどのようなことが問題になるか殆んどわからず、手元の文献を讀んでも私には十分な知識は得られなかつた。そこで、新しい問題が起つた場合にはそのつど、それを取り入れることにした。

そこで、ここでも私が考えて行つた順に述べたいと思う。

献立は量に就ては、ポーラーに於ては兎角荷物が多くなり勝ちだと考え、又、冬には可成り一食分の分量が多かつたような印象を持つていたので、ひかえ目にしたところ、完全に十分とは云えず、特に下の方では不十分だった。

次に献立て表の作成に就て述べたい。これが今度の食糧計画で特に目新しい点だと思つが従来の、そのキャンプに割合で入れた食糧を適当に使つて行くという方法ではなく、各キャンプ毎に「何日目の朝の献立はこれこれ」という具合に厳密に規定し、これを符号で表わし一らん表を作成して全員に配布した。

従つて食糧係は何処に居てもどのキャンプに何がどれだけあるかを可成り正確に把握でき又炊事に際してまごつくことになかつたのは一応成功だったと云えよう。(具體例に就ては注を参照)

なお、パツキングは、全部ブリキ缶を使い、原則としてカーボンボックスは廃した。缶の外側には目録を張り混乱を避ける爲、BCには黒、CIは青、CIIは茶、CIIIは赤で色分けした。こうして出来た食糧は総計五八貫で図の如くである。但し時に各キャンプに必要なものを上げられないことを予想し、CI用の三十一貫を四回に、CII用十四貫は二回に分けて荷上げてきたようにパツキングした。

BC		4 box.	7貫550
CI	1回	5	8.250
	2"	5	9.600
	3"	3	7.200
	4"	3	5.700
	計	16	31.000
CII	1回	4	6.800
	2"	4	7.200
	計	8	14.00
CIII		4	6.400

この爲一回の食事の準備に三つも四つもの缶のフタを開かねばならないといふ不手際は避けられた。

これと同時に、各缶の重量の均一化といふ問題が起つたが、準備期間が短かつたせいもあり、解決し得なかつた。その爲に可成りの不均衡があり、現地での真術調整に苦労した。

實際に山に入つての結果は、すでに述べたように全体として分量不足勝ちであつたこと（これは予定された停滯が無かつたのでその分々適手に使つて補つた）、ケランカーのおかずが粗末と不評であつたこと、

C工の人数が多過ぎて餅が仲々煮えず炊事に長時間を要したこと、飽きないようにと目刺しと味淋干しを併用したのがかえつて繁雜化したこと、等の基本的な失敗の他に様々な技術的な面での不満があつた。又献立ての指定も現段階以上に細かくするに精密であるが爲にかえつて混乱と不正確を招くことになる恐れがある。

これらのことは今後の合宿で次々に解決して行くべきことであり、この立場に立つて、我々の食糧計画の相対的な未熟を早急に取返し一定の水準にまで引上げる爲、部全体の批判と努力が如えられなければならない。

要するに極地法とは、食糧計画を手際よく運営することである。と云ふことを改めて悟つた次である。

注 献立て表について

まず、行動表に基いてギマンP毎の毎日の夜の人数を表にした。(表1) 日付けは停滯のない場合に予定される日付けで行動表と一致している。日番といふのは、模型的に停滯をC工とは三日に一回、C工以上では三日に二回とした場合、何日目であるかを示したもので、従つて例えば二十一日、二十二日とつづけて行動できた場合、六日目の翌日は九日目というわけである。又、夜の人数を書いたのは、例えば二十一日の夜と二十二日の朝、昼は人数が同じであることを意味する。(ギマンPの人数は昼間に変動する)。

以下C工に例をとりてまず食事の組合せを作つて記号化した(表2)

次に行動、停滯のそれぞれの手定日毎に献立表を作成した(表3)。行動日は肉食、停滯日は三食とした。行動日に肉食から始まつているのは、そこから翌日の朝食まで、人数に変更がないからである。又、行動のつもりで朝食を作り、その後で停滯に変更しても主食に狂いが生じないよう、例えば六日

の工欄(すなわちオ九日の朝食、B十a十C)を使つた後で停滯しても、主食の面からみればオ七日の工に予定されたB十Cと結果的に同じになるように組合せた。行動日にせよ、停滯日にせよ、一日に同じものを三回食べなくてもよい様に組んであるのは勿論であるが、このことはC工の表だけからは分らないが、キヤンプを変つた者も一日に同じものを三回食べないようにしてある。

この他に各獣立毎に使用する材料内容、人数と材料の量の関係の表、各キヤンプ毎に荷上げされた材料の種類と量の表、及正誤表をプリントして全員に配布した。

各々の缶の内容と目方に就ては缶に表示してある他、三種のゴビーを作つて食糧係三人が管理した。

## 一九五八年度冬山春山合宿

本年度の冬山および春山合宿計画が次のように決定致しました。先輩諸兄も何卒御参加の上御指導下さい。

### ○冬山合宿

瀬沢岳 西尾根より北穂高岳および奥穂高岳

期間 12月24日—1月10日(チーフ山本信樹)(13)

蒲田川右俣、白出沢出合附近にBCを置き、瀬沢岳

頂上にトイレ設備して北穂および奥穂へアタックを行

う予定

### ○春山合宿

黒部上郷下横断

期間 3月上旬—4月上旬(チーフ山本信樹)

懸索の黒部上郷下横断に向うことになりました。

計画は大町より烏帽子小屋を至て赤牛岳に達し、赤

牛左尾根よりスゴの出合—スゴの頭に達するもので

11月に一応このコースの横断に成功し又烏帽子小屋

には相当量の装備食糧をボツカ致しました。

表1 入数表 (夜)

日付 日番 状況 BH CI CII CIII

18	1		16			
19	2		13	3		
	3	停	"	"		
20	4		8	9		
	5	停	"	"		
21	6			14	4	
	7	停		"	"	
	8	停		"	"	
22	9			9	9	
	10	停		"	"	
	11	停		"	"	
23	12			4	4	4
	13	停		"	"	"
	14	停		"	"	"
24	15			"	"	"
	16	停		"	"	"
25	17			12		(予備4)
計			60	125	59	24

表2 CIIの食争内容

C'	C	B'	B	A
	ポタージュスープ		コンソメスープ	カレー + そば
	+		+	
餅	そば	餅	そば	

H	G'	G	F	E	E
ジュース、チーズ、クラッカー	ミルク、レーズン、パン	紅茶、レーズン、パン	紅茶、チーズ、パン	紅茶、ジャム、クラッカー	ミルク、ジャム、クラッカー

e	d	c	b	a
双かん缶	味淋手し	目刺し	らっきょ	橋神づけ

献立一覽表作成例

(CIIを中心として)

表3 CIIの献立表

行	日番	人数	翌日			
			III(前)	IV(後)	I(朝)	II(昼)
動	6	4	E	C+d+b	B'+a+c	G
	9	9	H	A+b	C+d	F
	12	4	E	B+a+d	C'+e+c	G
	15	4	E	B'+c+e	B'+a+d	F
精			I	II	III	IV
	7	4	B'+c	E'	/	C+a
	8	4	A'+d	G'		B+b
	10	9	C'+d	E		B+a
	11	9	A+d	F		C+b
	13	4	C'+c	E'		B+a
	14	4	A+d	G'		C+b
16	4	B'+d	H	A+a		

一九五七年度

# 夏山穂高合宿報告

岡田博司

昭和三十二年度の新人部員数はかつてない程増加した。このことは直ちに夏山合宿に影響し、参加者総数三十四名という合宿になった。このためのテントが不足し殆んど使用に耐えぬ、バカ夫までも動員し、体育会からも一部を借りて間に合わせた。

計画の概要は、合宿用の荷物を全部かつぎ徳本峠をこえる。

これは喧騒な夏の上高地をさける意味と、又非常に良いトレーニングになると考えたからである。そして横尾にBCを置き、全員が週沢を中心とした岩登りと雪渓技術の練習をし、その間一時二年以上の部員は奥又池畔にACを出して、前穂の東壁などを登り再び全員が横尾に集まってきたから解散し縦走に移る。大体この様な計画で、上級部員のみが別行動するのは以前から問題であったが、始めての試みである。出発は、多人数がまとまって設置出来る様、朝年より数日早く、七月十五日とした。

メンバー

- 岡田(シ) 山田(SL) 榎下(SL) 大井 森川 渡辺 飯田 乾山
  - 本 兼清 野田 平田 米林 平野 田端 木村 田村 大
  - 島 笠松 玉井 三宅 佐藤 田井 廣瀬 村井 梶山 小
  - 野 今井 横尾 井畑 黒田 穴戸(他)に産経新聞記者二名
- 参加

7月14日に先発3名が松本へ行き、氷 野家 及びトラック運送の準備をした。

7月15日 本隊が大坂発、翌日大坂を発つ者も3名いた。

7月16日 早朝松本に着いてトラックで荷物と島々を運ぶ。

縦走用の荷物のみトラックで運び、合宿用の荷物は担いで徳本峠をこえる予定だったが、島々で、上高地迄の道路の不通箇所が復旧していないことが判り、全部を担いで徳本越ということになった。荷分の結果、一人当りの負担は重くなり、島々谷々を登ったのである。

この結果、翌日徳沢を出た頃には日はとつぷり暮れてしまし、一日後からバスで入った部員に迎えられる横尾のキマンが地に到着したのは九時半で他のテントがとつぷる眼り



についた頃だつた。

7月18日 あまりはつきりしない空を先に見ながら淵沢へ行き、警溪でグリセードの練習を行つた。一時相当に強い雨にわか雨があり、明文堂とユツテの仮設テントに逃げ込んだ。

7月19日 朝から雨で停滞したが、パンの梱包などか運つてしまつた。

7月20日 二年以上の詔買が奥又白の池にテントを出す日である。岡田(し) 樋下 大井 乾 飯田 山田 兼清 山本 野田 の9人は新人のサポートを受けて中尾新道から奥又白の池へ入つた。松高ルンゼは上部ががさがかり、警溪はくたズタに切れてすさまじい様相を見せていた。

奥又白の池には大阪工六、神戸大等のテントが張つてあつた。降りしきる小雨の中でドロドロの粘土の上にテントを建てた。

二張のテントは離れていて、相互の連絡は不使だつた。

7月21日 天気はじつと思わしくない。昼近く天気が回復してきたので岡田は横尾へ下り、二名がテントに残り、あとはA沢―前穂へ登り、三名づつに分れて明神回峰往復し北尾根縦走を行つた。北尾根パーティーは五、六のコー―奥又本谷至由明神パーティーはA沢を下つた。

7月22日 曇つていたが、回復したら四峰明大ルート、B

Aフェースなど登らうと六人でB沢を登つた。だが四峰の下へ来ても全く見通しが効かず、四峰の登攀は断念して全員でズタズタに切れかかつたC沢に入った。B沢には大きなクレパスがつづき、簡単に登れそうには見えなかつた。インゼルの上端でトツプが死体を見つけたが、これは後に日本アルコウ会の遺難者しわかつた。ピツチを上げて、三町のコーへ上ると三十人程の人々が集つていた。北尾根縦走中三峰から転落されたとのこと。御冥福を祈つて折からの豪雨の中を五六のコーへ向つた。コーから下り、一人が転倒して手などに怪傷を負つた。グリセードの失敗である。ACへ帰ると、横尾から奥戸0Bまで平坦が連絡に来ていたので、重傷者をつれて帰つてもらった。

一方横尾に残つたメンバーは

7月21日 蝶ヶ岳より常念岳、一の候縦走を行つ、天候は晴れまはいたが、穂高は上部がガスに隠れていた。常念迄は何のこともなかつたが、一の候の下りはかなり悪かつた。

7月22日 本日は奥穂往復天候は朝から思わしくなくザイテングラードから穂高小屋につくと、激しい雨となり頂上の展望もみかす一回すぶぬれ帰る。

7月23日 興又曰のA.C.を撤収し、横尾へ下ると、酒沢ニテ  
ントを煮つていた女子部員の一人が北穂附近で足に負傷してと  
いう知らせが入っており、くわしいことがよく分らないので、  
興又曰から下つて来た三年生が直ちに筋田(山)と共に酒沢へ上つ  
た。他の部員はズレぶりにちらちらとのぞく青空にシムラマを  
掲げていた。中戸OBは大坂へ帰る。

7月24日 合宿最後の日、酒沢との連絡を兼ね、こうやう一  
日もちろむ空模様様の下を全員で北穂に登った。途中で下つて  
くる女子部員に出会い、大したこともなかったことを知った。  
滝谷はその険悪な様相をカズの向に隠見させていた。

興穂の小屋の前で全員はニパーティに別れ、そのままB.Cへ  
帰るメンバーを見送つて8人が興穂の頂上へ登った。そしてグリ  
ヒートで酒沢へ下り、B.Cへ帰つたのである。

晩は最後夜なので食べきれぬ程せんざいを作り、ギマンアファ  
イアを囲んで歌を唱つて合宿を終えたわけである。

この合宿では梅雨の終りか例年より遅れ、終に一度もサイル  
を結ぶことはできなかったが、それなりに我々は新しい経験を  
した。我々はこれを足場としてより優れた山行をするように努  
かし、この合宿で得られた成果を土かして行きたいものである。

## 冬山食糧

# 特製パンについて

野田 憲 一郎

赤牛岳の登頂の爲には、すべての面に於て軽量化を主目標とさ  
れて来た。そこで当然、主食の大部分を占めたパンについて、  
特にこれも要求された。

パン二五。食は秋に荷上げをし、冬までの二ヶ月間双六小屋  
に貯蔵されるのであるから、この長期間に發酵しない、といふ  
ことも重要なポイントの一つである。

幸い、神戸屋パンK.K.の御好意により、次のような条件下のパン  
を使用した。

(i) パンを堅焼きにすることにより軽量、小体積、変質変形しに  
くいようにする。

(ii) パンの形をできるだけ直方体に近くして梱包時の無駄な空間  
をなくす。

(iii) 水無しでも食べられるように、又多量に食べても飽きないよ  
うに適當な味をつける。

(iv) 有効な添加物を多く入れ栄養価を高める。

(V) パン一個又は三個宛袋に入れて清潔と分配の便を計る。  
そこで次ぎのようなパンを試作した。

(W) パンの配合の検討——脂肪を強調したもの。乳製品を多量に含んだもの。砂糖を多く含んだもの。の三種試作した。

(b) 防腐試験　三種の試作品を、ポリエチレンの袋に入れて、冷蔵庫に三日間入れ、カビの発生状態を調査。

砂糖を多く含んだものはカビが発生しにくいから、焼く時に表面がこげ易い。

乳製品を多く含んだものは、中には、40%の糖分が含まれてい  
るし、又味もよい。

結局、実験も短時間だったので、満足な成果は得られなかったが、乳製品を、多く含んだものを、えらんだ。

(C) この配合で、低温で長時間にわたって焼き、最も水分の少ない時期に一ヶずつポリエチレン又は硫酸紙の袋に入れ、これを6個ずつ更に三重のポリエチレン袋に入れ、シリカゲルと共に密封した。これを、カートンボックスに入れて。

これを、11月2日及び3日に双六小屋に荷上げした。又コン  
トロールとして、神戸屋製の食パン、アメリカンブレッド(食

パンの一種) コッパパン、牛乳パン、ウインナーロール、ホン  
スロール、おぐらパンを選び、同じように梱包して、2ヶ月の  
保存に耐えるかどうか荷上げした。

結果としては

I 固さも水無しで食べるのに適当。カビもはえてないし、豆  
餡の変化もなく味も良好だった。

II 形も行動中に食べ易い。

III 量は、1食2ヶを用意したが、15本でも充分。停滞は一ヶ  
でも充分。

コントロールのパンについて

一般に、凍って少々固くなっているが、充分そのままでべられ  
る。食パンも、トーストにすると新しいのとほとんど味も変ら  
ない。カビもない。牛乳パンの中の牛乳が少々酸酵していた様  
な味がしているのを除いては、試作品とのちがいはないといっ  
てよい。

なお、双六小屋に荷上げしてから、使用する迄、気温が0℃  
を越えた日は無いものと考えられる。

(C) の試験は、今後も続行したいと思つ。

# 冬用テント製作報告

六 戸 二 元

前回までに作製したナイロン製テントは、内外の遠征隊の記録を参考にしたり、私たちの経験も加えて、阪大独自のテントを設計してきた。そのためか、支柱の接合部など、規格にない部分があるため部品の故障、紛失の場合など、かえって不便の面が大きかった。

それで今回はあまり新しい考えを加えないで、もつともオートドックススチールド型テント（外張り式）を作った。大きさは桁地をもつとも経済的に裁断できる大きさを考えにいれて、テントの幅、奥行、高さを決定した。支柱はジュラルミン（三本継）を用い、接合部は市販のもの（図参照）を採用し、中央にフレームを入れた。布地はナイロンより重量はあるが、耐久力と、雨に対する防水の面をも考えてビニロンを使った。色はオレンジである。

冬山（三候蓮華岳）、春山（天狗尾根）、五月山行（赤沢）

で使用した長所、欠点はつぎの通りである。

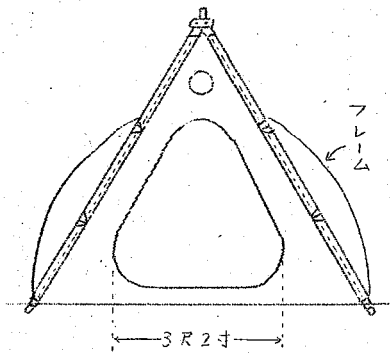
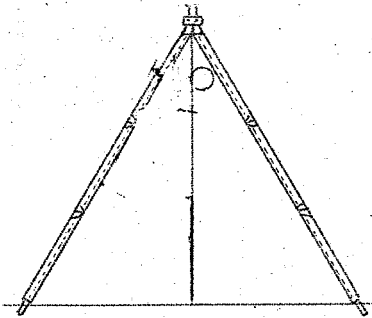
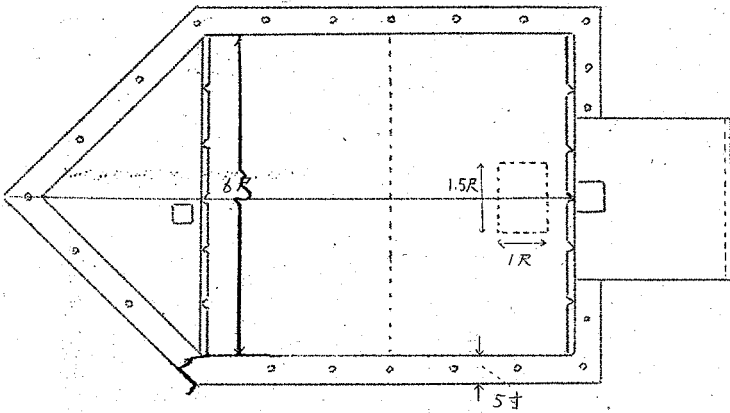
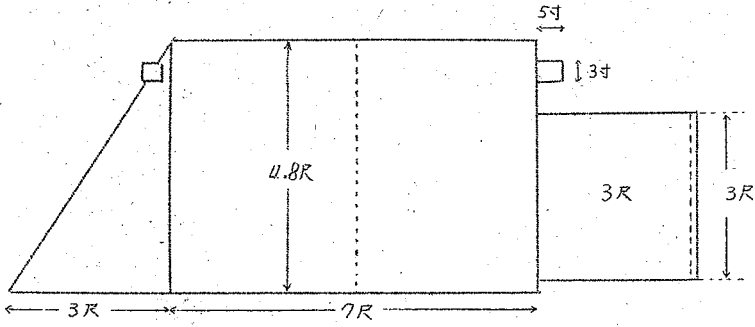
① 三本継ぎの支柱は運搬が容易に付った反面、テントをたてる場合に、支柱のサマも細いのも手伝ってテントをたてるのに苦労した。

② フレームは、阪大のテントとしては初めての試みであるが、内部が広く使える上、横からの強風に耐れ安定がよい。

③ 入口、小さすぎる。四・五人用のこの種のテントで四人揃って出入りできることが必要だと思ふが、メーカーとの連絡不十分で最初の計画通りいかなかった。

④ ナイロン二号テントと同様、三角張出しの後室を設けたが、居住性をよくする意味で、今回も非常に好評だった。

# ミード型ビニロンテント



一九五七年度

# 一般山行報告

## ○富士山 (4月27日～5月1日)

山本(一)、米林、平野、田中

4月27日 大阪発

28日 (曇、小雨) 富士宮(5.2) — 合五勺(10.0) — 六合目(4.3)

29日 (快晴) 出発(8.3) — 六合目(11.0) — 頂上(13.1)

五合目(5.3)

30日 (快晴) 出発(8.0) — 吉田(10.4) — 大阪

雪は四合まではない。四合五勺あたりから沢の中にまで相当量の残雪を見る。六合までは夏道のように雪渓の中やかちを登る。

28日は快晴でアイゼンをつけて小屋のすぐ上から一気に頂上まで直登した。心配しなくてもよい。六合あたりから登行は急登

しさを覚えて足も気も乱れる。頂上はさすがに烈風が吹きまくって食事も満足にとれぬ。下りは平野が前夜からの下痢で調子を乱し、セツかくのグリセドがふいにぼっこしまったの亦残念である。山中湖は五月晴で美しい。(山本)

## ○穂高山行 (明神→奥穂)

メンバー 藤清、穴ノ08

期向 4月28日～5月4日

4月28日 (曇) 沢渡(8.3) — 大正池(9.3) — 上高地(11.0) — 30 — 前明神 沢出合(3.0) — 上高地(4.3)

上高地線のバスはスノーセットの所不通でバスは、手前でストップ、上高地では旅館が二三軒開いていた。

29日 (晴) 出発(4.0) — 10.30 — 中食(12.0) — 明神4峰最高峰の

コル手前(3.0) — ビバーク地(5.0)

途中で市大の春のスリッパの荷を発見したりして時間が予想以上にかなり明神4峰岳沢側の岩とはえ松の面がビバークする。

30日 (晴後曇がス) 出発(10.0) — 前穂明神コル(1.0) — 前

穂頂上(3.0) — 奥穂頂上(5.2) — 穂高小舎(6.0) 奥

穂積上車前からガスとなる。前穂積上でOB二木氏のパーティに会う。

5月7日 小雪夕方晴、朝から雪が降り停滞

2日 晴後雪、午前中晴れていたが穂積小金出谷の頃から天氣が悪化して来た。洞沢ヒユッテ前の二木氏のパーティのテントに宿る。

3日 快晴、洞沢谷(12.30)―横尾(3.00)3.30―穂沢園(4.30)―上高地(6.00)―トトラック中の湯(7.00)

北尾根に行く予定であったが洞沢が一面の表層ナグレ毎のご中止して下った。上高地は行きの静けさと打ってかわって夏の上高地を思い出させる様に多くの人が入っていた。

4日 曇、中の湯(6.30)―沢渡(10.30) 橋かけかえのためバスが沢渡までしか入ってはいけないので疲れた体をひきずって沢渡に下る。(兼清)

◎ 笹ヶ峰学連合同登山

4月28日―5月2日

参加 関西学生山岳連盟参加大学代表

阪大代表 〓 岡田、野田

時同記録

4月27日 大塚谷

4月28日 (薄曇) 田口駅―(バス)―杉野沢村―笹ヶ峰京大ヒユッテ

4月29日 (晴) 外輪山他一カ所に分散ツアー 野田軽い捻座

4月30日 (晴) 黒沢池方面へ全員ツアー、野田停滞

5月1日 (雨後曇) 午後、近くの斜面でスキー練習

5月2日 (曇) 解散、各自適当に下山

笹ヶ峰は目前に黒姫山を望み静かな牧場で京大ヒユッテも仲々感じがよい。附近の山はのんびりした山行が味わえよう。

(野田)

◎ 西穂高

4月28日―5月2日

四方、山田、飯田、乾

4月28日 (18.10) 大塚駅発

4月29日 (晴) バスは沢渡手前まで、大正池から見る穂高に

は予想外に雪が少なかった。

4月30日 (晴) (7.00) 上高地を出発、西穂高荘を経て西穂高

へ。(17.00) 上高地へ降りた。

5月1日(雨後曇) 停滞

5月2日(曇後雨) 日数に制限あるので帰る事にする。四方

山田、飯田はバス路を、乾は徳本峠を越えた。

(6:10) 帝國ホテル(7:10) 明神池(7:20) 徳本峠登り口

(8:10) 明神見晴台(9:00) 大遼山手前のピークより下山

(9:50) 徳本登り口(11:30) 徳本峠(13:05) 島々(乾)

◎ 五 麓 — 白 馬

1937 5月

×ムバー 種下、大井

4月28日 16:10 発

4月29日 快晴 8:00 神杖着、8:25 水道小屋通過、11:05 小遠

見小屋の昼食、12:00 出、1:00 大遠見着、4:30 白岳下、6:00

五麓小屋着 海曇なり、夕食後外に出て見ると、淡い苔の屋

空に、あまりにも鮮やかな「尻」の「アランドロラン」

下苔壁をみつけ、しばらくは声も出なかった。

4月30日 薄曇、後風雨、6:15 起床、7:30 小屋発、8:10 五麓頂

上、夏晴らしは非常によかった。10:30 小屋にて昼食、11:45 発

途中の雷雨を避けかけながら3:00 唐松小屋着、唐松を往復す。

5月1日 暴風雨、ガス、停滞

5月2日 高曇り、後吹雪

5:30 起床、6:30 朝食、7:00 小屋発、8:10 エレット、雪庇は少

々残っている。11:30 白馬×リにさしかかると吹雪激しく視界

20米、1:30 白馬村彦小屋

5月3日 快晴、雲海、頂上を往復して、10:00 下山、雪溪上端

の雪庇危険な所を薄くはたき、デブリにつまづくこともなく

ガス中を快速でつききる。10:45 白馬尻、12:30 唐所手前で坪

井、東氏等四名の白馬主旅行と行き合う。1:20 細野、

規模は小さいが、明るく自由な山行として記憶に残るものでした。(大井)

◎ 白 馬 岳

6月6日(6月10日)

×ムバー 森川(和)、一山、松本昭

6月7日(雨) 四ッ谷—細野—猿倉 雪猿倉より、

8日(雨) 8:00 猿倉発、10:30 三合雪溪別荘目、12:00 迄様子

を見て引返す。

9日 ガス、快晴 5:00 発、11:00 頂上、12:00 発下山して大



阪へ。(森川)

● 槍—白馬 縦走

メンバー 兼清、平田、米林(佐藤—烏帽子下山)

期日 7月25日—28日5日 (山本、野田、大島、田村)  
五升 槍より下山

7月25日(晴)後曇。夕方より雨(横尾(9:30)—赤沢岩小舎(12:00)—中食(12:00—12:30)—殺生小舎横(5:30) 大

島が途中で左手をしばらし相当所まで行つておひ肩の小舎の医者によると下山せよとの事。

26日 雨、停滯、大雨注意報が出ていると小舎で云つて来た。

27日 雨、停滯、雨が続き、こんどたき物の少し所で炊事に苦労する。

28日 雨、停滯、今日で停滯三日、調子の悪い者が大部出て来た。

29日 晴時々曇 殺生岩(8:40)—槍の肩(9:20—10:45)—中食(12:30—1:13:20)—双六小舎(2:45—3:00)—三俣レンゲヒ—

ク下々メンバー地(4:30) 昨夜バカ天の支柱を支える所が強風でぶられた。今日からは兼清、米林、平田、佐藤の四名である。

30日(曇)ガス、午後雨(三俣レンゲ岩(9:30)—三俣レンゲ小舎(8:15—8:45) 水晶小舎(11:15)—累岳(12:00)—水晶小舎(2:30)—東沢乗越(5:30—3:15)

鷺羽岳は雲の平側のまき道を通り時向をかせいだが、水晶の小舎跡の所で累岳の方に上等の道がついていゝので右にまがらずまっすぐに累岳の方に行つてしまつた。東沢乗越まで来ると雨が降り出したので隠匿。

31日(晴)出発(8:00)—野口五郎岳(9:50) 烏帽子小舎(12:50—2:00)—烏帽子タンボ(2:45) 昨日の失敗のため今日の行程が中途半端なものとなり一日口スする。

8月1日(快晴)出発(6:00)—南沢岳(6:45)—中食(10:45—11:40)—2.の<sup>2.00</sup>コル(1:30)—船窪小舎(3:45)

縦走が始まつて初めの快晴であった。烏帽子からは人はいなく、良いが道が悪くものすこい所だ。

2日(快晴)出発(5:55)—七倉岳(6:30)—北葛岳(8:15)—蓮華岳—北葛岳のコル(9:20)—蓮華岳(11:30—12:15)—針ノ木峠(12:45—2:10)—針の木岳(3:15)—針の木スバリのコル(4:00) ついに後立に足をかみ入れた。後をかりかえれば槍が遠くにみえる。

3日(晴午後時に曇)出発(6:30)―赤沢岳(8:15)―鳴沢岳(9:15)―新鬼越(10:00)―中食(12:00)―種池(2:30)―冷池(3:45)―鹿島槍釣尾根(6:45)

新鬼越には一片の雪も一酒の水も残がった。昨日こゝまで足をのはしこいたら苦勞したであらう。釣尾根は非常によいキャンプサイトだ。

4日(晴、午後一時ガス)出発(8:00)―マレット小舎(9:00)

―中食(11:30)―五竜岳(1:30)―白岳小舎(2:10)―中食(4:10)―唐松小舎前(5:10)

後立も今日でほとんど終りと成った。さすがに鹿島をこえると多くの人がいる。唐松小舎の前にはおびただしい数のテントが張られていた。

5日(曇後雨)出発(6:30)―白馬驛(10:30)―村宮小舎(11:30)―白馬尻(3:15)―猿谷(4:15)―細野(5:30)

今日縦走最後の日である。今にもくすれそうな天気のもとを今日中に細野に下るといふのが猛スピードとばす。杓子岳のあたりから雨が降り出した。村宮小舎に着いてバスの時間を聞いたらぎりぎりであったし、雨も降っているのて頂上はあき

らめて一目散、猿倉に向って時間記録の標に一般の半分の時間まで届いてはいる標はスピードを出した。

バスの中ではと毎りの女の子が顔を見合っていた。7月15日松本出発以来二十日ぶりに風呂に入りたてぬの上におた。

◎ 黒部 源流 (失敗)

(兼清)

飯田、田端、乾

7月25日(晴後雨)

(5:00)起床、(8:20)橋尾、(11:00)槍沢、(16:30)飛騨乗越

槍頂上、(19:00)テント地

何とがして本日中に双六へ入ってしまいかつたが、9時目程度の荷を槍沢へへばった。肩を越えて直ぐ天候も悪化して硫黄沢乗越迄も行けなかつたので、肩と硫黄沢乗越の中間にテントを張った。

7月26日(雨)

夜半よりの豪雨、而も場所悪く傾斜地なので実にぬじめた。テントは倒れる。水はシニラフを流れると云った状態。寝かえりすると背中をびしゃびしゃと音する。四時頃起きて直ぐ双六小屋に逃げ込んだ。採沢の登りは全くハテた。小舎

は迷げ込んだパーティーで納賈。

7月26日 (雨後曇)

15時40分僅かに雨が止んだので直ぐ出発。三俣蓮華にテントを張る。

7月28日 (雨) 停滞

7月29日 (曇のち晴)

雨がつついて黒部川繁沢水合も流れたいとの事。従って最  
低金作谷迄下りたい計画も問題にならず、又繁沢をためて  
有峯へ出るのも無理との事なので烏帽子から下山する事にし  
た。濁沢を降りた所でテントを張った。

7月30日 (晴)

テント地—崎温泉—大町

(乾)

◎ 三伏 峠—虚見岳

メンバー 岡田博、平野恵一、梶山泰男

8月4日 23<sup>h</sup>30<sup>m</sup> 大隈迄

5日 雨も上り15<sup>00</sup>鹿嶋着、30<sup>m</sup>歩いて湯湯で宿。

6日 7<sup>00</sup>出発、曇り、11<sup>00</sup>広河原着、取つきより苦しい登り  
雨降り出す。14<sup>30</sup>三伏峠着。雨のお花畑が目にしみる。三伏

小屋で宿る。

7日 8<sup>00</sup>三伏小屋発、晴、11<sup>30</sup>虚見岳、お花畑で昼食、本谷

山で雨ふり出す。15<sup>00</sup>小屋に帰る。

8日 10<sup>00</sup>岡田、鹿嶋に下る。11<sup>00</sup>平野、梶山、西俣を下り二

軒小屋にかけこむ。14<sup>30</sup>二軒小屋で泊る。

9日 6<sup>00</sup>二軒小屋発、息がききって飯付峠、7<sup>15</sup>峠を下れば

自動車道、とはして新倉9<sup>30</sup>。バスを身延—帰阪 (平野)

◎ 裏銀座縦走 (下廊下より変更)

メンバー 山田、大井、木村、横尾、田井、小野、今井

記録は黒部源流と同じ。

◎ 白山 五井

8月19日 晴強風 勝山07<sup>00</sup> <sup>バス</sup>市瀬09<sup>00</sup>—別当谷出合12<sup>00</sup>

豊新道 室堂14<sup>50</sup>

8月20日 ガス強風 室堂05<sup>00</sup>—御前岳頂上05<sup>30</sup>—室堂07<sup>00</sup>

—別当谷出合08<sup>30</sup>—市瀬09<sup>35</sup> (五井)

◎ 棒小屋沢 — 十字峽 — 鋺岳

8月20日〜27日 村瀬、広橋のB

21日(晴) 大谷原9時—西谷出合11時—冷小屋4時

22日(晴後曇) 8時小屋のすぐ裏から沢に向かつて直降、一時

向余で削けた川原に降り立つ。棒小屋沢だ。布引沢コマウラ沢を右に見て牛首沢を過ぎると、やがて川は急速に狭まり滝となる。右岸をへつると突然左手からすさまじい勢で西沢小沢が飛び込んる来る。出合には閉電幕舎が遠慮せうに並んでゐる。丁度正午、昼食をとる。閉電の人の話によると十字峽の釣橋は流失したと云つ。仕方なく牛首の腹を大きく捲いてゐる閉電道をつたつ。此の捲き道は剣の大滝を真正面から眺めて素晴らしい。人夫が幾人も道具を運んでゐた。午後5時東谷の出合に到着、河原の野宿。雨がポツリポツリと降り出した。飯場の灯がうらめしい。

23日(曇後快晴) 昨晚の雨で全身ビシヨ濡れ。クラッカーをかじつて9時出発。下廊下は通過不能とか、どうにか通れるとか人の話ばかりまちまち。半月峽の字峽を定下に楽しめながら11時十字峽着。黒部本流に架けられた釣橋は流失してはいい

かつたが相当傾いて渡るにはかたりの勇氣を要する状態だつた。剣沢の吊橋を渡つて昼食。シムラーフを乾してから午後1時偵察に向つ。白竜峽の手前全くの懸下状の絶壁の処で棧道が完全にぶち切れてゐた。他にルートを探して又た岩所登無駄な努力とあきらめて引降す。午後3時、腹一杯食つて今日も野宿だ。

24日(雨後曇後雨) 明け方から降り出した雨は徐々に止みさうにない。10時十字峽を後にする。意氣消沈、1時阿首原、上りはかなりこたえた。4時過ぎから亦雨、ブル／＼と腹を食らう時前仙人小屋に飛び込む。

25日(ガス後快晴) ガスの積れるのを待って、9時小屋登、既に内蔵助入りの考えは放棄したので暢気に二股で飯を炊きハダカになつて三時向急腹、5時剣沢小屋に着く。星空を眺めながら始めて快的な露餐を楽しんだ。

26日(晴後曇) 10時から三時向余で剣往復。大日を越える積りだったか又も天候悪化のさざレ、遂に最終バス目かけて雷鳴沢を、超スピードで駆け降りた。(広橋)

8月29日(晴) 孤野→朝明ヒユツテ(泊)  
8月30日(快晴)

(6:30) ヒユツテ発、(7:10) 羽鳥峯、(8:10) 白滝出合  
(9:40) 天狗滝、(12:10) 下水島谷出合、(14:30) 杉峠、  
(15:15) 雨乞岳、(16:30) 根の平峠、(17:00) 朝明ヒユツテ  
(19:20) 孤野、(19:53) 四日市→名古屋。

白滝出合より少し上流大きく迂曲して廊下状湖の手前で右岸  
を高捲きする。又本流に降りて渡渉しつゝ遊行、天狗滝を覓  
て少し戻つて右岸を直登し道を越え又本流に降りる。廊下状  
になる所はケルンを探レ高捲きする。ヒコ沢出合を過ぎると  
大きく迂曲して狭い廊下となる。左岸を捲くと登山路に出る。  
直ぐ下水島谷出合、大霧水終つた所又本流に降り、あとは  
気持のよい稜流をジマブジマブ歩くだけ。

大峰と大台の谷と異なり花崗岩の明るい沢歩き亦楽しめる。  
石棉花の咲く頃や紅葉の時季短らもつと素晴らしいだろう。

◎ 中央アルプス縦走

1. 期日 10月13日〜10月16日  
2. メムバー 山本、兼清、水城

(乾)

10月13日午後2時天王寺発午後10時5分本宮福島着 駒の湯  
に泊

10月14日(晴)

6:00起床、6:15駒の湯出発、9:30出合、10:30五合、11:30六合  
4:30宮田小屋着、宿泊す、新雪全くなし。紅葉やや過ぎた感  
じ。

10月15日(晴) 5:40出発、8:40松尾岳、12:50越越着13:40出発

15:00空木岳頂上、15:45出発、16:10空木小屋着。

10月16日(晴後曇) 6:15出発、7:10空木岳、8:50南駒山頂、

10:00仙塵嶺、11:15越百山頂、12:15越百小屋、13:15出発、17:15

飯田線七久保駅着。

秋の試験休みには前から黒部上廊下へ行きたいと考えていた  
が日教不足りぬため中央アルプス縦走を企てた。上松から上ら  
ずに本宮福島にしたことに別な意味はない。

稜線には新雪は全くなく高く山は紅葉が大体落ちた後だった。

それども部分的には十分我々の目を楽しませてくれた。中ア稜  
線は宝剣附近に少し嫌なところがある外は登り下りは多いが、  
たん／＼とれた縦走路がある。西方には絶えず御岳の秀れた山  
容を眺めることが出来るし、東方には甲斐駒以下の隔了連山、

その間から富士山も大きく見えている。北方には泉敷がらぎ、  
穂高本遠望されるし、入ヶ岳はすぐ眼前に美しい裾野をひろげ  
ている。天気の良い時のこの稜線は正に展望コースと云ふべくこ  
ゝろ知らなかつた。スケールは小さいが、大阪からのアプローチ  
もかたなり近いし、短時間で十分楽しめる山々である。(米林)

○ 奥 秩 父

山田、乾

10月26日

大阪駅発 18:09

10月27日(晴れたり曇ったり)

6:59 荊崎→増富→チウム鉱泉→金山高原→16:30 大日小屋

金山高原は顔の染まる藤原紅葉。

10月28日(晴れたり曇ったり)

5:30 大日小屋、7:30 金峰山→鉄山→朝日山→大池→國師岳

16:50 水師岳、17:30 甲武信岳、17:50 甲武信小屋

10月29日(曇後雨)

6:10 甲武信小屋、6:30 甲武信岳→西沢→千曲源流→8:40 鞍馬

7:45 梓山、10:50 信濃川上→小淵沢

(乾)

○ 秋 山 双六→燕岳

冬季赤生岳登頂の爲の荷上げをした後三パーティーに別れて縦  
走したか、我々九人は燕まで行くことにした。

ムムバー 村瀬(シ)、平田、米林、田村、黒田、大工原、

水村

11月4日 曇 槍迄は三パーティー共に行く。雪は少く槍の登  
りのところで始めて踏みしめた。

双六小屋 19:35→乗越(12:25→13:00)→肩の小屋

11月5日 曇のち雪

さすがに袴まで来ればもう雪化粧をしていた。こちらから  
見た北嶺は西嶺より見たまじ程すばらしくはない。日の照り  
返しに目を細めて西岳に向う。雪は少くしまつて来た。九  
時頃より雪ちらつき始める。西岳の登りは少し苦しむ。西岳  
小屋にて昼食。大天井ヒュッテのところまで三パーティーと別  
れる。チラチラする雪の中を蒸へ。裏銀座展望コースを歩き  
ながらそれを見得なかつたのは残念であった。

晩飯の味増につけてあつたことを忘れその上に燻をか  
けて食つたテクの羊かつたこと……、常念パーティーもやつた  
由。人間似と争を考ふるものだが、笑ひ合つたことである。

肩の小屋は7:45—西岳小屋(11:10—12:10)—燕冬季小屋7:00

(平田)

◎ 双六岳 ↓ 槍ヶ岳 ↓ 常念岳 縦走

11月4日く 11月7日

メムバー 山本(シ)、野田(シ)、広瀬、田井、笠松、玉井、大島

11月4日(曇)

起床 8:00 出発 10:30、千丈沢乗越(昼食) 12:30、槍肩小屋15:30、夕食 18:30

千丈沢組を先頭に次々と出発する。小休止所に先にたどり、後になつて少しづつ槍に近づく。

西鎌尾振の最後の急斜面は雪が三十センチ位積もり、これがクラストして、非常に歩きにくい。なにしろ私達新人はこんな状態の雪に会うのは初めてなので大いにまごついた。しかしどうやらこうやら肩の小屋につく。さすがに風も強く、手かじびれそうだ。うれしいことに小屋には番人が居り、ストーヴをたいていた。早速とび込んで暖を取る。ひよいと外の寒暖計を見るとなんと氷点下十度で、又新人一同驚きの声をあげる。

11月5日(晴後吹雪)

起床 5:30、出発 7:45、殺生小屋 8:00、西岳小屋(昼食)

11:45、常念小屋 16:45、夕食 18:30

天気予報によると今日は吹雪である。明方、ガスがひどく槍の穂先も全然見えなかったが、朝食も済んだ頃には次第に晴れてきたので、出発することにする。燕組と一纏に東鎌を下る。

昨日と同様、雪がクラストしてこの歩きにくい。それに恐怖心も手伝い、鎖又はしこのかが、こいる所は大いに時間をとる。西岳小屋で昼食をとった頃から、天気かくすれ始め、以後はずっと吹雪が続く。大天井岳で燕組と別れ私たちは常念小屋へと急ぐ。吹雪は一層つのり、視界は百米位である。此間と磁石を頼りにして何回も方向を確かめながら進む。東大天井、横通岳を過ぎ、常念小屋への下りにかかる頃には薄暗くなり始め、棒や杖の林を抜けて、小屋のトタン屋根を登見したときはホッとした。小屋には番人が居た。

計画では大滝、徳谷と縦走する予定だったが、悪天の為中止し、明日一沢を降ることにする。その結果夕食はゴースー友ものになった。

11月6日(晴)

起床5:30、出発7:40、佐原9:05、ワサビ沢出合(昼食)11:10  
鳥川橋14:40 ↓ 松本 (大島)

◎ 双六—千丈沢—葛

メンバー 菅原、前田、佐藤

11月4日、双六小屋を出たのは10時だった。空は曇っていたが低くはなかった。はい松の緑が生彩を失っていた。菅田新道が槍の西鎌尾根に達するところ、ここを出たのは1時だった。

眼前にまびえこいる等の槍はカスの彼方に没していた。千丈沢のからがりの下りは急な長く、そして歩きにくかった。七百メートル下っただろうが、岩の下からちよろ／＼と流れる水を効つけた。襟等が下るにつれて、この流れも大きくなり、水が滝高瀬川の激流に姿をあらわす。道は谷間にさしかかる。秋の落葉が厚く散り敷いている。谷のむこうに、時々、思いがけず猿が吠える。暗い溪谷から眺めると、ここには陽があたっているかのように思われるのだった。湯候の出合は五時だった。僕らのびて返ければ、四時半にはついていた筈だ。その後、まだ80分ほど下って、とある飯場泊った。これは千丈沢を出合った人夫たちの好意によるもので、一泊二食付タダであった。

5日、高曇り。8時半に飯場を出た。「後といひらがあつたらまた会いましょう」と人夫たちの一人はさんぽふうに云った。川に沿った森林鉄道の枕木を踏んで下りつづけた。葛温泉に下りたのは1時半だった。(佐藤)

◎ 双六—槍—南岳—上高地 岡田東清

11月4日 双六—槍の肩 他のパーティーと同じ。

11月5日 雲後風雪 下は雨

槍山荘迄8:50—中岳9:50—南岳11:25—リリ5中岳—槍山荘  
11:55—12:30—横尾16:50

槍から鷹高に縦走するつもりであったが、天気が悪く停滞するとゲルが反るのを空身で南岳まで完全に視界をささぎられた雪の中を往復して来て横尾へ雨の中降りた。

11月6日 高曇り 9:00横尾巻—12:00上高地橋

ほとんど人のいぬい道を秋の静けさにひたりながら岡田さんと二人のんびりと上高地へ歩いた。途中で見た雲の切れた明  
細取南峰は美しかった。(兼清)



雪は予想外に少なかつた。凍つ白な山を予想していた凍清帯と自分の二人、神城駅に下りてしばし嘔然とした。途端にワカンの目方だけ荷が重く感じられたことである。

二人だけの山行は気のおもむくまま、又格別な味がある。

落葉につつまれた細い山道、遠見の支線隊に出る。自分の耳で踏みしめた山々を味い、その時々を懐想する時、懐しい想ひ出なよみ返つて来る。今は雪化粧した白馬三山、恵岳、少し顔まのぞかせている五竜……。現実に戻つて登る時はつらい。雪荷に喘ぎ、小遠見に着く。クラッカーをひっそりと食つている前迄他パーティが美味まつら大さなおはぎを、バクついていた。け。この辺りから少し雪がでて来た。鹿島槍がこれでもかと思ひ壁の前に積えて雄姿を見せる。大遠見でテントを張ることにするが、雪の葺きの格好なテント場はない。あたりをスヨロスヨロ二人は捜しまわつた。夕陽に映える五竜が我々を待っている。コッヘルに雪をとる時、チラ／＼また／＼星が明日の晴天を伝えてくれた。翌日は早く出た。サブを一つかっついで、こゝろをこっついで来たのだからアイゼンを着けて夏道を登けて沢を登る。モデルになつたりなつてもらつた。ヒリして白虫の小屋に着く。後継の夏山はこゝろ／＼こゝろ出て来た。十二時頃五竜頂上に着く。剣

立山本実にはすばらしい。兼師、かすかに槍ヶ岳をのぞかせている。早々にテントをたゝんで凍りついた道を幾度も降りもちをつきながら奥の黒坂中を神城に下りた。冬山の時吹雪の中、テントを張つたどき／＼まぎれに記録を失つたのは残念である。

◎ 奥越高原 経ヶ岳

(平田)

メンバー 田村、笠松、五井

3月7日 早朝福井につき勝山市の雁ヶ原スキー場にて集しむ。

雪も人もすくぬい。

3月2日く3月5日 大野市六右師スキー場。天気亦くすれたためプッシュが完全にふまり、初歩的な練習を行つた。

3月6日 高雲兼良、経ヶ岳

どうやらスキーがでるようになったので、当地よりすばらしく見える経ヶ岳へアタックすることにした。フ時知入宅を出発。

9時西向にとりつきシールをつける。南側に雪庇が多ので此側を

ジツ／＼登る。10時より急斜面にとりつき11時半頃の氷壁につき少し登ってスキーをテボる食をこる。アイゼンビッケルを持たず、ワカンだけ

けはの雪の底のある細い尾根を時向をくい、20mピクまで達した。かあと20mの尾根が非常にグラストしているのこゝろで引返した。

4時テボにつき、6時に帰營する。

(五井)

# 岩登りトレーニング記録

昭和三十三年度は岩登りトレーニングもかなり充実したものが行われた。意気盛んな新人が多数いたためである。又その効果も十分に上がった様だ。以下その記録を簡単に記す。

5月18日—5月19日 新人歓迎キャンプ

現役・OB・新人の交際に愉快に遊んだ。

道場

5月26日 仁川岩場トレーニング、バットレスにて確保の練習

上級部員の参加少レ。

参加者 岡田、山田、野田、兼清(新人)、小野、大島、三宅、玉井、田井、木村、平田、横尾、前田、田端、佐藤(

OB) 西川、松本

6月2日 屏風岩 各ルートの登攀

大井、山本、兼清、飯田、大島、三宅、田村、玉井、米林、

小野、井畑、今井、小野、笠松、萩村、平田、広瀬OB、松本

6月9日 芦屋ロックガーデン

A班 西川OB、野田、Bケン、キマックス

B班 樋下、山本、キマックス、イタリアン、ブラックフ

エイズ

参加者 上原、佐藤、三宅、木村、梶山、井畑、今井、米林

小野、玉井、笠松、大島、前田、田端

6月16日 屏風岩

参加者 岡田、一山、森川、野田、兼清、大島、玉井、笠松

佐藤、田井、横尾、今井、井畑、広瀬

私鉄ストの影響が、集りや悪し。新人部員の上達振りも目に見えてきた。

6月23日 六甲大月谷

大月谷より主稜線に出て、更に東六甲を縦走し宝塚に至る。

参加者 山本、野田、米林、玉井、笠松、田村、田井、梶山

前田、横尾、黒田、今井、井畑、大工原、平田、木村、広

瀬、小野(公)

6月30日 芦屋ロックガーデン

参加者 岡田、森川敬、大島、三宅、玉井、笠松、佐藤、田

村、田井、平田、広瀬、大工原、黒田、河津、小野

7月14日 芦屋ロックガーデン

参加者 兼清、森川敬、米林、田村、広瀬

8月20日 仁川岩場

参加者 山本、米林、佐藤、梶山

10月9日-10日 道場河原にてスマンパ

不参加者 百大岩にて練習

参加者 野田、山本、平田、米林、玉井、梶山、田村、田井

佐藤

10月20日 歩行トレーニング

不参加者 花屋敷、石瀬寺、十方江、武田尾、千刈、道場

参加者 方瀬、田村、大島、大工原、田井、森村

11月23日 芦屋ロックガーデン

午前中イタリアンリッツ、スマックスウォールに、午後ブラッ

クフェイス↓城山

一年生部員の成長振り順調、トップを登らせても安心して見  
ておられる様になった。

参加者 岡田、野田、山本、米林、大島、三宅、玉井、佐藤

笠松、田井、梶山、大工原、野瀬、玄瀬

12月1日 蓬萊峽

参加者 岡田、野田、兼清、米林、平田、大工原、玉井、玄

松、佐藤、田村、梶山、大島

12月7日 芦屋ロックガーデン

参加者 米林、平田、田井、大島

12月8日 芦屋↓宝塚

不参加者 笠松、大工原、大島、田村、村井

12月15日 箕面↓妙見

大島、田村、三宅

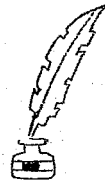
# ビニロン一号テント製作 寄附金決算報告

昨年末テント新調について先輩諸兄から多大の御援助を頂き誠にありがとうございました。お陰様で本誌報に報告致しました様に、冬山、春山の合宿を成功させることが出来ました。寄附金集金責任者の奥戸元氏（医卒）より明細書を頂きまして、この丘に報告致します。

収入合計	42,350
ト作費	27,500
通信費他	3,512
残高	11,338

残金は、パーナ一、エアーマツトなどの装備の購入にあてさせていただきます。

# 編集後記



なお寄附金も寄せ下さり、左の方を左に上げ、厚く感謝致します。

医学部 小沢基次、水野祥太郎、徳永篤司、岩永剛、松久博、小沢運天、石沢命久、伊藤俊夫、坪井圭之助、大久保勝己、東雅、尾藤昭二、佐舌仙也、穴戸元

工学部 篠田軍治、近彰三、二本郎夫、西川元夫、立花直治、川島勇、宮本貞雄、久保三朗、京極与拜郎、松本裕太郎、乾晶弘、梶原信夫

理学部 大島禪夫、加藤幹太、大村一生、新保正樹、水野健次郎、山本進一郎

法学部 山本光三、広橋茂

経済学部 土屋直氏

養学部 三枝礼子、抱忠男

文学部 由以波色也

(以上41氏)

## 寄附御願い

昨年末用テントを新調し、使用可能なテントは二張となり、また水、今面の冬山合宿、来春の春山合宿に備えて更に二張の新調を計画致しております。何とぞ御援助下さいます様、お願い致します。

◎今面の時報第九号は七月初旬に発行の予定であった。そのため原稿も早めに集めていたのが、主要な一部の原稿が非常に遅れ、これから夏山合宿、九月十月の試験のため計画が捗らず、結局、昨年同様年末発行となった。これは編集者の能力が足りなかったためで、深くお詫びする次第である。

◎今迄時報に名簿を付けていたが、最近非常に不明瞭になっており、その整理もまた十分でないので、名簿だけで改めて発行することにした。その方が訂正出版も容易であるだろうと思つ。今後OB諸氏も転居されれば場合々と連絡の労をとりたい。

◎近年各山岳会の会報出版も盛んになり、年三回以上出版も普通となりつゝある。我々山岳会においては毎年現役不全を交担当し、しかもこれが毎年交代するので不慣れのため仲々スムーズに行かない。時報発行が山岳会としての重要な仕事の一つであるのだから、ここに時報発行の一つの組織を作ることを提案したい。例文はOB数人と現役幹部により時報編集委員会のようなを作り、OBと現役の密接な連絡のもとに計画

を進めていく。こうして三三三を三三三年続けると時報編集から発行迄一つの工程の如きものが出来上り、今の様留年編集者が新しい向題にぶつかって困っているよりも、ずっとスムーズに返ると思う。

◎内容については、特に目新しい点はないが、椽田先生には昨年渡米された際のお土産話を書いていただいた。一般の山行記録は、例年余り簡単すぎて味もなかったので、少し文章も入れた。そのため頁数もやや増加してしまつた。

今回の編集にあたり小穴先生等に多くの助言を頂いた。又規役田村、玉井両君にもいろいろ助けを頂いた。厚く感謝する次第である。  
(米林外茂男)

昭和三十三年十二月

大阪大学 山岳会 時報 第四号  
編集責任者 米林外茂男

発行所 大阪市北区富安町  
大阪大学 学生部 内  
大阪大学 山岳会

印刷所 大阪市西区江戸堀北通三番  
美研社  
電話(4)五〇八番

石橋、阪大北校道の  
学生さんのオアシス!

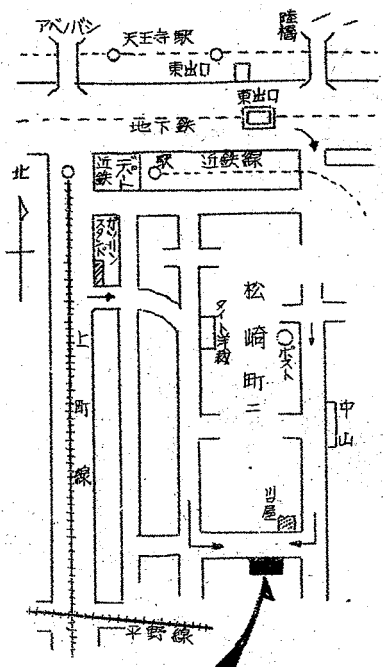
実質本位 憩食堂

電・北田 8609

階上伝統のコンパ座席(席次奉仕)  
別館増設階下座席( )  
麻雀4、碁2、将棋2  
別室喫茶室 LP. EP. 豊富  
イヅレモ自由解放

大正九年より伝統のある

吉田屋の  
山  
スキ  
靴靴



吉田屋株式会社

大阪市阿倍野区松崎町三丁目三八番地  
電話 天王寺 (77) 九五四一 番

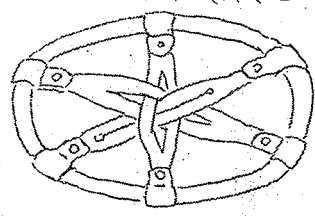
# スキー

# 冬山

スキー・冬山用品

袖錫行  
スキーバス 毎週土曜  
(夜)発  
2月1日スキーバス  
(スキーコート付)

貸スキー  
貸グス  
予約貸



# 山の店

〒591  
34-4192

大阪市北区曽根崎上1-24

◎各大学山岳部の  
御用を承っております

パン

食で

いつも

健康



パンの王様



神戸屋パン

本社工場 大阪・福島・西通 ㊟7791代表

西淀工場 大阪・西淀川・御幣島 ㊟0712

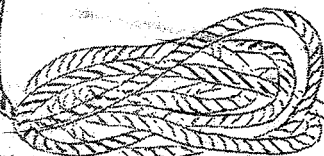


都心にある山小屋  
 山へ行く人々の相談所  
 北口山岳スキー研究所



ま、とにかいくら  
 してみて下さい。  
 そういふ夜なんて  
 すうちは親身にな  
 つかといふのがE  
 外一  
 御満足得られる  
 でせうネット。

大阪市北区絹笠町十一  
 (堂ヶ丘裏・回生病院北側)  
 電話 (34) 3240



あなたの上達を保证する

ラニ

スキー 1959



ベルグ印



本店---大阪淀屋橋  
東京支店---神田小川町

美津濃